

小精雜識

五

大正十三年六月
上院起筆

特別
14
1919
363



小精雅藏五

大正十三年六月一日起筆



〇假名のあゝし底取く美人画の錦巻が新撮り合は
 際ハ豆のんてあゝ、まゝハ錦巻をきく家もまゝ巻き
 全く因縁のまゝの家もまゝ、早まカザリにるを欠きア
 ラクに量りてあゝ〜いかにあゝ通道の折り目二つえ
 るを祝き込あせえのが、誰んのまゝとも判しきぬれそ
 の情ハ紙ハパイに女の後ろ姿をえせれ、まゝハ、其女ハ茶
 紺の着ものをもきせぬ、まゝハ、白ろく見え透へてあゝ、

金印

模铸



原印

印 花六心

歯が金塊とありて残つた多んを
紀念に石塚齒科匠が義歯
をゆる模铸せし五峯の貴印
を金を材料として模铸し
いどうかと云ふに任るも自分

が印遣から選び出した印が即ち長相思の三字を
刻したるもので此の三字の紀念の意が當るとして
この印、紀念印の出版の際、
この印、二箇心りて一箇を五峯の家へ
一顆の余り贈るとは、鈕の橋鈕に、余が印遣、金印
の傍らにこれが所始ありとある

○稀書複製が五月中に完成し本に花物お見

自由自さいと云ふ冊子がある、
この細見の
飾りて高居の名を胃腸一陽の大きき書き上りの
紋、擬つたものがあつた、
物産をそろへてやりとと云ふのが細見と倣つて
下隅にある、
つむらうつて挙げたあつた、
自慢傳入新狂言と云ふのを取らしめたことかある、
七新狂言の書付、倣つて名物を挙げたものがある
か、
名物お見の魚の部を名ると細見の橋名のあるもの
おとらやちま」とありて、
か、
か、

町の切つるあるを居るくおーより、父ハりの里のお
化けの柳を連れがぶいあんもきりの悪い思ひ
をーにといふのむあるころの
らんといふ人か、さすかに昔の人ハのんきき
とつくく思ひまーに

〇栗田典一が春杯を持ち来り示す、雪の舞の四什うし
ハ杯の題運、題詩あり、曾て此物あるとあり、左
と見よハ初め也、ハ杯のやうな思ひなる出前七添
へき、終ふ迄也をゆせし真物也

おの桐の杯

おの表に「春日杯」とあり、おのの杯

益裏に左の文あり

不湯庵通信公^軍中

所用稱春日杯、又稱

御通杯、米澤侯府

今猶存、數百枚也、杯

其品區四分、沼右、素の

氏所存大金師因
法因寺主請而得之
余为题以一绝

天保丙申中元前一日
小竹散人篠崎弼識

孟中二金藤を以つ左の詩詩あり

醜酒斌明月

越公一世雄

三更過一影

曾映此杯中

小竹

深くなる香筒ハ幅ニ寸五分長を二尺許のさうり
心詩の思構や杯の破換るまきことハ世公へ一
といろく認のち、此の筒尾に雲喜白題の
詩あり

余六題一詩徹ハ井筒と曰ハ初坊

越公芳戦士

藤平相恩杯

古名殷花血

英瓜生上未

珍物多んまるの十内と云ふかある燗ハが
余ハ山陽杯と春日杯の山陽の記文あり、これカ
係也録すへキ歎

栗田の流りに雲蓋所持の木装織鉢（高）を所持しての
にことかあるといふは、まゐるまゝ山陽自刻の鉢が
あり鉢の折り曲つた縁の裏より山田の文を
山形が描かれ珍異のうしろあつたとつゝ、此の織
鉢ハ木地其傍に何れ冷たくいよの鉢とやへに
又山陽が依る信淵、貯つた瓢が長く秋田の作
為家と花をえんは、まゐる大差の木をのちる物
にことかあつたかとも鳥取の某家に移つた
此の瓢貯り首の瓢と名づけんと首が細
く永く、口をい比む口か首もさ可多下つて喉
ともそのへき所であつたとさふ色ハ全体は赤く
一尺餘の高さハ、山陽はまゝに山形を画し題詞

カあるを返おに信淵に貯さすも録し山陽の題
意ハあつたは時傳工が其の書畫を金に時記
其の委細の書ハ匣裏に信淵に伝つて書か
匣の蓋の表より銀字ハ瓢の名と録し、三
重の糸に納めたる珠をい比とつた、山陽の瓢を
樂よりありさうあることハあると云へ依る
信淵との交りも孰てハ未だ深く証あること
とか無い、山陽銀瓢の部よりいんハ挿入すべ
きことあらう

○此の購ひ得る圖書の由る一二録するは是の
かある

此書ハ元禄十五年京都の山崎木村市郎兵衛
の出版に係り、美濃紙大形本也、圖表を十
数に分ち凡そ倭刺の書ハ漏さず収めてある
各書ニ解説がある、枕形ノ横本ハ強ク
珍しく、其ハ此大本と稀観がある、惜しい
ことハ直本行流版本も此を以て此を
と原稿に用ひたり、各頁に洋字が丁ツケ
がある、幸に汚損はるゝが、ケ候ることハ好書
家の禁物である、當りてハ重刊博士の花を
ひあつたと見え、此亦花書の印記かあ
る、

一 輯定人お葉話

一冊

寶曆十四年甲申の春正月朝鮮の信使が
来朝の時浪毒の宿帳に我邦の人お家
退南道人新山退が信使一行の人おを鑑
し葉話し、此をの首年と稱し上
げし、此の如く、玉白駒等の他の書がある、此
の相家の東奥の人である、後浪毒と信し
たのである、各家の相を判して何れをの肯
かした、信使并に遣使の書信も数枚採
りてある、大坂の天橋や屋敷版とあり、あ
る、人お書の由の稀観の如く、一種の興味
がある

一 料理秘伝抄

大巻

一冊

此書の料理物修が本名ひあるらしい。寛永二
十年の版である。恐らく料理の書の版本の
ハ尤もたるいものがある。各條を後に見
るべきの可感するものと此頃既に庖丁の基
に進出するにことである。今もあんなに大
抵の調理法は早くから行われてゐるのや寧
ろ一部を喫するものがある。巻尾に武州
狭山書之と落款して跋がある。江戸出版
と見る。

一 不動尊愚抄

一冊

不動尊の名字や其の像の形式や其年日
持物や其他を考証しそのを揮毫もある

全部漢文の佛像研究する材料とするもの
ある。刊年の初とあるのが本屋に在る(前
校とある。寛文文頃の年代と推し得る趣があ
る)

一 名臺巻経

四帖

此法帖珠音のものか、唯比古板と墨を
よき明代の楊子修と思ひしものか。贗品の
各帖に秋府回香の印記あり。秋田炭の巻本
と推せし。天寶年間唐の玄宗の自書
自注を巻尾に帝の書と大書勅書と
刻す。巻尾と重んじざる。昔時此書の珠と
せえたる想ふべし。

○今次の総選挙より早大校友の希望者も五十の五十七名
を数に校友革新会中之諸団体と協同校友希望者も
り就中、憲派に属するもの三十数名あり、既述の如く
多数の校友希望者を擁護し得たることいふべきが、永樂
從支部に属する校友有志五十数名ありて去
日三十日市面ホレに招待其の祝宴を施す。金子等
校の幹部とこれに陪席して祝宴の旨を告ぐの誠意
ハ三十五六名に由り三人の校友希望者の中のものあり
後司會者より新選派の起りて選挙中の所懐
を陳べんことを求め、指名するに起るに合演説を演
あるもの十数に及ぶ。黨の要人とも同席の扱ひあり、
隔意なき散言の人を以て談を解かすものあり。政

及今所属の諸校友、同く此席に在りて憲派の
衆議院議員自合カ憲派に籍を移すといふ氣がす
る但し此席限りの言はれとすもあつた。中是れ出れば校友
の言に倦んぬといふといふもあつた。或るもの、官憲の干
渉を懸念し、困むることを述べり。あるもの、前所属の星
一と敵に回して流すことを恐るる。前所属ハ久米義興
本位がよめり、受けると笑つた。あるもの、新籍を承
し選挙中各晩後後ある婦人を誘ふに及ばぬといふ
敵の夫人があつた。この夫人が猛烈に戸別訪問をや
り、閉口して往々途寸に出人等して先方より挨拶せん
夢寐に此人が眼前に千ううう程悩ますといふと語

日もあつた、あるよりの市選後の心得三ヶ条を挙げた、
其中よりいさくさうであることの一條を挙げたのを
愛嬌心あつた、新内の子井ハ山と目三ハ駿河と戦つ
たことをその新内ハ砂地ハ松の育つ地也、初めから松
ハ栄くると軍動負ハ之れを標榜して果して竹を伏し
得たといふたあるよりの行旅、願正心て自分も富士に登ら
んとするよ今ヤット御殿城とせしめた、んかろが唾手
一番を要するといふた、早大の教授内ヶ崎作三郎を子
後の職を放擲して選る城とまつたのを敵黨に職
職を以て譲つたことを云ふた、まんこ對し自分ハ政治科
を受持つてゐるが、實地の選るを知らぬ、自分の家産地
地とまつたのハ實地研究がある、三句のみの技をゆけて

もまんび元り返りかつく、市選して御城とまつたことを
つたかろ、金に實地の政治を自ら研究して学生に移
すの機を得たをい、例のこと、まあること、を云ふ
た、十人十様の思ひの告白の場、成光ハ賑の地場の
、三木武友ハ出合つた三木ハ志きう、御無何法と云ふて叩頭す
のかろ、余ハ其の肩を撫しハ一里の新誠者か一里の自分の家
、来たかろ、才一三君の別宅、行く扱組本とせしと我ハ
れハ、三木の別宅ハ牛込のあり待合をせしと云ふた
○阪上博士(弘茂)から五年連続する余ハ又妻ハ注射
を受けてゐる、此次者ハ、存を宣ふたハ、震る哭ハ何
れハ七歳の子ハ、かろ、額と指物を押さしてん、と教
せん、町の教員、揮毫して中ハ、薬局と掲げる、

と勿誤しの二字を移した、浅田宗伯ハ勿誤葉室と云ふ
堂號と一にことを思ひ出し、此の二字を書したの心
も、葉室の樂齋の此二字を存してゐる、某友人の心
に書しに款面と云ふたの如く押書した、大言の事

の言ハ三莫に通ハせるの事である、六月二日
の獨乙、音楽研究に出してゐた、曲恒
が帰朝の出巻に獨乙の玩具の扱ふ
よゝを貯えん、犀野ふ小運の蓋を
のけと見え、中へ塗金の鈴と、湯米
細子の扱ふ鳥とか、運入つてゐた、此の鈴
ハ獨乙の田舎ハ牛の頸へ吊けるもの
木彫の鳥ハ例の幸福の鳥ハ、箱

事
来莫放
去莫追
多莫怕

ハ里名を帯びた木ハ、峯ハ三寸五分長さ三寸許
ハ、餘者ハ蓋の蓋の上ハ山を刻し、杉を施
してある、ゲートハ故郷の百姓が作つた、此の蓋
其の粗野無骨なる、不々多々の趣がある、バラウリ時
代の日本の文房具と云ふ、調和する、扱ふ氣がする、獨乙
ハ戦後、度々此の心を古く、バラウリ式に下
し、此の親セある、ゲートハ何と云ふ、縁上である、
伊新吾、喜多、忍びず、假りにハ印を収める、此の
ハ、他の二器ハ、矢吹が前に、終つた、瑞西の田舎
家の模型の家根が、餘者ハ蓋の扱ふ、此の中、扱
が入る、扱ふ、うつてゐるから、是れに納め、六月二日
○六月二日、越前守河所の安田次郎と稱書後

製本同人より昭和の書内を愛けり席上余も
提議して同人擔任執筆此方の紀念出版として未
十月迄刊行せんとす、各據市の執筆題目は左
の如し、前巻に掲げると同じからざる所ありて其
掲す、

- 一 江戸時代の一夜の特質 和田
- 一 我回最古の刊行圖書 林
- 一 稀観圖書複製製本の必要 内田
- 一 趣味上より見る古版圖書 藤懸
- 一 浮世傳の普及及隆替 坂谷
- 一 元禄前後の一夜類の様相 黒木
- 一 古澤瑞稿本并古狂言本

世界に類例なきもの芝居傳の特長は内
一夜と浮世傳の社会に及ぼせる感に
減亡：瀕したる我が版畫術 山田
狭斜文の並立 三田村
絶版とどうする基督教徒の出版 新村
一 回考録の備へらるる特別圖書 市路
掲而るる重複を同人の外に新村、三田村、坂谷
藤懸の四氏より特に寄稿を依頼する事
書名として何れも是の概ひを以てす
一 藝術者としての古版圖書
一 滅びんとする古版圖書
一 古版圖書の振興観

一 浮世傳及古版揮画の印象
 一 趣味の古版研究

此考卷の④、内容にあらざるものあり、古版研究の
 のことき文字の圓も販賣の範囲を狭くする
 趣ひがあるから、あるべく廻けることなりとい
 此。偽出度、大体を決す
 安田界、此を稀散若千と示す

○印刷用のインキは獨乙のライグリーの *Bonguet + Nika*
 ともある(販賣する)のが世界一般に行い、廣く
 ある(佐良)も、此のインキは頗る堅練り、割易
 の時、心解けぬらくせず、烈寒の時、も亦後、
 乾らざること、無い、堅く、つ、しが、
 十二

高に、高く、和らげ、
 ●ミニニール、ヤウ、ト、ヤ、
 文(る)の、初年、
 詳か、
 び、
 刷拍と、
 油、
 ハ、
 の、
 日本、
 だ、

折詰る文

米國移民局法に於て五月三十一日前原大使から國務長官ヒューズ氏に手交された我正式抗議の本文は一日午前十一時外務省から發表されたが其内容は左の通りである

以舊約教條上輕重者千九百二十四年五月二十六日許可せられたる千九百二十四年移民局法第十三條(一)項に包含せらるる日本人差別的规定に關し本使は茲に政府の訓令に依り日本の立場を闡明せる覺書を閣下に提出するの光榮を有し候

尙日本政府が右覺書を米政府に提出するは全く虛心坦率友好の精神に出づるものなるを以て米國政府に於ても同一の精神に依り之を接受せらるべきを確信し此の旨を附言すべきことを命ぜられ候本使は茲に閣下に向つて重ねて敬意を表し候 敬具

忍ぶ可らざる差別待遇

國務長官 チャールス・ヒューズ閣下
一、日本政府は米國に於て千九百二十四年移民局法第十三條(一)項に包含せられたる日本人差別的规定に關し本使は茲に政府の訓令に依り日本の立場を闡明せる覺書を閣下に提出するの光榮を有し候

國務長官 チャールス・ヒューズ閣下
一、日本政府は米國に於て千九百二十四年移民局法第十三條(一)項に包含せられたる日本人差別的规定に關し本使は茲に政府の訓令に依り日本の立場を闡明せる覺書を閣下に提出するの光榮を有し候

場合に於ても正義公平の原則に背反することば敢て言明を要せず惟ふに正義公平の原則は列強親交の甲斐なり現今一般に承認せられて米國の終極支持せる後台均等主義亦實に此の原則に基座を有す殊に人種に因る差別待遇は不快の影響一層深からざるを得ず千九百二十二年米國政府は外國に於て特殊人種の外國人が公平なる待遇を受けるべき之に對する三月二十一日の下院の決議に從ひ米國政府自ら人種に因る差別待遇に對し強く不滿の意を示され米國政府自ら人種に因る差別待遇に對し強く不滿の意を示され米國政府自ら人種に因る差別待遇に對し強く不滿の意を示され



米國移民局法に於て五月三十一日前原大使から國務長官ヒューズ氏に手交された我正式抗議の本文は一日午前十一時外務省から發表されたが其内容は左の通りである

日米條約の精神を蹂躪

四、將又同化の實現は公正平等なる待遇の温河ある一團氣中に於てのみ之を期するべきを以て約廿年向米國の若干諸州に於て日本人が法律上並に事實上舉り來れるが如き冷酷なる差別待遇の下に於ては同化力の自然的發達の阻害せらるべきは當然なり一社會自ら或外國分子を融餘の分子より隔離しなが其外國分子が該社會組織中に融合せざるを非難するが如きは公平の所見に非ざるべし從て日本人に對する非同化性の論議は根本的に不正なるが然らざれば少くも時期尚早たるを免れず

日米條約の

日米條約に於ける通商條約を考察するに千八百九十四年
其の論議第一條には左記の如き條文を記す
「本國政府は他國の領土に對し其國の利益を保護するに在り且其國の領土に對し其國の利益を保護するに在り且其國の領土に對し其國の利益を保護するに在り且其國の領土に對し其國の利益を保護するに在り」

日本が外國の親善關係の爲に過
例に依り突如として彼國せられ
協定の了解は今や米國の立行
り反復討論、未成せざる及好的
米國國政府に於て長時日に亘
を不能ならしむるに至れり且
紳士協約に因る實際の困難を
法律の規定は既に日本國に於て
人に對し差別待遇を改める如
に表示せり然るに不幸に、日本
を改訂するの意向あることを
顯現するの意向を以て現在取
廢しして因り外交的交渉及解
るの措置あるに於ては問題の
し外國に對して別に公正を失
外國の正當なる自衛心と國際
に於ける移民人種の制度及原
去十六歳以上上尉を以て配
且其間に遵守される自衛的取
根本論としては各國の故國
に於ける移民人種の制度及原
當り外國の正當なる自衛心と國際
に於ける移民人種の制度及原
當り外國の正當なる自衛心と國際
に於ける移民人種の制度及原

紳士協約は破壊された

紳士協約は破壊された
八、本に所謂紳士協約なるものを
考査するに同協約は一方に於て
日本移民に關し米國政府の認め
たる現行法に對し其必要に別はんが
獨又他の一方に於ては米國が
日本人の正當なる感情を尊重す
べき排外規定の必要を見ること
せられたるものにして千九百八
年より實施せられたるが如し
著其の勳章を續けり合衆國移
民長官年報中に掲載せられたる
の協定に對する協賛を興へ且此
の協定に對する協賛を興へ且此
の協定に對する協賛を興へ且此
の協定に對する協賛を興へ且此
の協定に對する協賛を興へ且此

○昨夏の雨火の厄に亡びたる印方から此印の
灰燼中より拾ひ出
るもの其印鋪より
會津藩獲りたり余に
贈る印文奇家刻赤
印、材石、花弁の鈕に
印云



吳江縣石

在、材石、花弁の鈕に

刻しある火を好む質緒に變りし形換せし
癸亥災禍の紀念に我印筵に之れを納する可也
六月四日記

○南葵文庫に墓碣圖志といふ書本が二十四冊花
ある本志書十八冊拾遺(四冊)これに往年一読し此時
著者が拙稿を著し、を以て之れを自筆中の原稿に
十二

こと聞いし時よりある集めし、二千からの史に人の
墓碣の圖と刻字が丁寧な書し、其際、
著者の名七字あり、石油時報に余が
隨筆を連載することとなり、此書を載録する
にあり、南葵の著者其他を問ひ、其時
に著者、相高の能人、才三世大江丸を稱し、
此書に、汽車中、馬車を働かす師、
此こと也、其が終に、病歿し、此こと也、墓
碣圖志中の分類目録に、此書あり、
し、石油時報中の、物産雜著に、
昨夜六月増刊の溝渎伝、
見、其事、奇談、の著者、と云ふ、

よくと漢をえりて、その見著といふ下巻碇園志の著
作者が拙賦と云ふに動機や、其人の豪傑性を裁
つてあるに似てあるか、全部書き直して後し得ら
ぬものか、勿論だが、筆者は端書に此の園志の由来を
正確に録してある所から推すと、マシザウ架立の潤筆を
いふの類々思はれ、え来此の園志の大概は電氣持主に
勧めし南葵天庫に寄贈せしものかあるか、此の流
の材料も大概から出てあるか、と思はる、其の大概が
けば、吾々のことごとく思はる、雨り敢て可也
也彼の女とすしを録して見ると

馬喰町に流儀の事業をやつてゐる上総屋の息
子林金太郎と云ふが、凡俗道楽を仇憎とやり

公道を志し、若くは、其の金をつひ、事業の
ありそふむ、道の家道に急むたある時、知る其時
吾三河をといふ、弟引客の美婦人が、吾を家
の平な海をいふ、此殺那、此人が其時をの主
人に、此の金をいふ、萬引し、其時を自ら、精ひを
の世を伴ふて人無き、此の金、後事を戒めて、此
て其の精ひ得たる、其時を授け、其の金、後事を
と、此の金、大なり、其の金を、其の金、其の金、
と、其の金、其の金、其の金、其の金、其の金、
終に、其の金、其の金、其の金、其の金、其の金、
り、其の金、其の金、其の金、其の金、其の金、
其の金、其の金、其の金、其の金、其の金、

が停車場の方寸時東外に出以杖に揚帯して、
逃れ土浦市中を縫つておゝさし或る寺中の墓所
に達して爰に揚帯の金と一時隠すや久し或る卷
の蓋を押し上げると中より隠し入れ等を人知ん
お或るものか墓所に隠るゝを云を知つた、そのあ
が前年ノ菊引をして故に心ひあつた、金太り
ハ墓所を出ると其処に呼びあはらん、前年のこと
を言ひ出して、此が家に連れ行き酒をせしめ、
中一アサタセ終に墓の中の方寸をさし、此を急
急をのろくと一言も言はず、終に其処と其處とをり、
此女ハ菊引お由と評れらん、荒干の乾況をも
あつた、このあ、此の土浦も悪事をあつた、評あ交

かあつたのひある、お由の心と捕へらん、金太り
のことの白状をせ、金太りハ墓所が、あつらん
等をも、何時もお菊の金を墓衣の中へ隠し
の、終に其前の眼を道んだ、彼ハお由の入す
中房に置り、流死の場をせと切る、御友、若山と
いふ、若山を命をせし、其の身、若山、若山、
碓圓志をせつた、此とある、

二月廿日記

此女況ハお由、若山、若山、若山、若山、若山、
てある、
○例の如く、この圖書を廻り、左の数字と得

修入 延寶八年版 價二十圓也

一 秋夜長物語 一冊

河波四文庫 不忍文庫の印記多
古活字本 刊年ヲ潮ケトモ 慶長下

賞シキモノ 價三十圓也

一 秋月物語 三冊合 一冊

寛文四年刊 修入 價十六圓

一 庭北訓抄 阿佛尼著一卷のりとの 題一冊

伴蒿海述 田中訥言集 尾崎新嘉房

一 錦所談 二冊

山田以文決因有年録
有職の實の逸事也 天保五年の序

玉指

一 駱駝考 一冊

江戸宅山唐公控稿 安西武臣席巻校
文政七年刊

一 式目抄 二冊

寛永版と寛文との 稀本也 價二十圓

一 桶山遺事 五冊

大友氏宗室
杵河藩祖松岳公の事を載せ附する
言稿天史公の事を以てす 帆足宗重の

著也

一 因陀羅經 十五圓

佛教之闡揚する名目の出家をいふは

引とちり一冊抄みまをり刊年を
願ひし元禄を下とるもの也

一 天工開物

九冊

此書有用の書なるも今ハ極り稀なりとて
今迄の價の騰貴甚しくし今ニ千五
也

此年零次竹田の坊百に出るもの甚にあま
うの半日此の敷部を賄ひ得るの大収穫也大正
十三年六月五日東宮御成婚祝日
為一冊出き洩らししもの逸録す

一 泣血餘瀋

二冊

林道春の室荒川氏の平生を叙し

且の葬儀の事と記す 嗣子春高の筆
録に依り萬治の刊本也

此記す處の訓お門田の七と共ニ昔の著
述を其に田中訥言の給あり此の傳のありたる
價大に高し阿佛尼の此の訓（阿佛尼）雅嘉の序を
見ると昔の全文を石物せしむるを雅嘉披し出
しと其の由を記す

以上の流書一二を除く外物集博士より出たもの
也一切の圖書の目録あり入らざる無きもの
に出たるもの先代高世の自筆著書も混入
しある博士の末路も氣し妻子也此の博士
ハ別府の湯におちり此書のおを急速と云らる

此の指巻の拂も困る境遇にあつと者物も終る
○錦所談二冊山田以文の談を其好有年録す
る所也此指巻後一冊談より一二を録し可と

○片字

中古片字を用ふこと経頼御記を糸束記
と云信頼御記を八車記と云か如き八佛
家を起るる事し密宗を以て終る多
きやる片字を用ひて人の秘する料な
るも何れの時もかうつりしるゝに灌頂
を次丁と云ひ大和國室生龍穴を宇
一山と云ふ皆密家の語るるを以て可と
○以指巻物摸魚木形

寛元三年二月廿六日平戸記云第頼宿称
羞之杯飯之間念佛衆聞信尋来也京之
所云不知此徑迴之故也相具一個在者等
以指巻物等摸魚味形興味太深如此之間
日景推移跡々各分散

指巻物を思ふ擬を此のことハ飯飽長く行ハ
んれと見ゆる

○評

今め心考ある所の法金剛院の黄涉
潤の鐘の款設扶桑鐘秘集に載らん
と今今こゝに其書体を臨寫す

戊戌年四月十三日壬寅收糖屋評告

夫² 未連唐四鑄鐘

長曆日を以て考ふるに文武天皇二年戊戌四月
庚寅朔とあるに即ち言壬寅とあり、すなはち屋
の上の字疑くは糖の糖屋評評送る
ふし、糖屋は筑前国の郡名なり又評の字郡
の字の義より建體記に北月評とあり、唐帝
化に水部評儀式帳に難波朝廷天下三評
とあり、等を以て見れば今も筑前国糖屋郡法
鑄と云ふ所の鐘なること知るべし
物するに法全別段の鐘中、年河心のを此頃郡
の字より朝鮮の制に倣ふに評の字を郡
と云ふ

一 墨之訓

墨とスミと云ハ別リ、不論麩の義より前漢心
理志に論麩類と云ハ六典に論麩墨墨
とあるハ、ハ論麩類も出づ所の墨と云義
より今スミと云ハ墨を以て其類を呼
ぶこと知るべし又炭をスミと云ハ此轉語な
るべし

一 盤條

盤條の般の字論裝束鈔法記録尋に
皆悉にのらん、梅するに西宮に盤條つつく
あり、是るるに盤條ハ物と鳥獸等花
の形状一物二物と盤條とと云ふと云ふ

圓く是がきくし如盤をいふるなりし盤を
濁るる唱くしと後世書に書誤し
古集歌の盤ハ曲也とあるを以て知るなり

一 遣唐使祭神祇於春日山事

續記寶龜八年二月戊子遣唐使拜天神
地祇於春日山下、去年凡波不瀨不得渡海、
使人亦復頻以相替、至此副使ヤ野朝臣石
根重脩祭祀也、之を以て考るに、遣唐使
春日使春日山下に社祇を祭ることハ萬葉
十九卷及皇太后御河入唐の時賜の御歌
にも春日に祭神の日にあはる春日山と云
を祈ること流例るる歎れハ、安倍仲満唐

圓く二三の山に出し月か七と云ふも春日の山
を祈し昔を思出せよと云ふ説るに
七極あり歟

○又若干の圖書を掲げ、其内ハ芝田の同姓東里
喬守の圖書ニ部あり也、印記あり、(六月九日記)

一 杜工部集

二 卷十二册

明の嘉靖上乘の版式を宋政の面目を
仿し、卷首標題の次、

大明嘉靖而申玉几山人校刻

と刻す、此書ハ、黃鶴の注あり、他本ニ之ハ
を翻く、唯ハ我五山版杜集ニ之ハあり、杜甫
研究家の此版を得んことを欲するハ

此注ありし依り、同族の遺書に付價の不
慮ありしを詳せし購入(六十回)

一 中山傳信録

六冊

え七市崎東里の齋藤より自本也和
枚

一 石刻五経文字

三冊

一 石刻新加九経字様

一冊

家花松崎坊を模刻の二書あり又款莫
卿の墨帖千祿字書あり、模刻の二書
今稀款に属し世人太以重んずるも石宋
の可るるは花かす

傳入狂歌合二種を得せし今稀款に属す

一 今様職人各歌合

二冊

此書又以八年新島國花歌を撰者
鐵通屋大門判者本村^{新島}領あり、
蕙尚の書を挿入し(彩もあり)今殊
年よりこれ歌よりより挿入あり、
而撰者判者上巻下巻各異し上
上巻は前掲のことと下巻は撰者五柳
園二人判者六指^{五柳}也六指^{五柳}の
序は真款の跋あり

一 紅藪紫藪

一冊

天保六年秋刊す所より和記の如
歌より六文字元成の類ある所

左方換者黒川喜村右方換者元成也
因移るもあつちと一戦一のよし係
る。

○清浦内閣の結成結果の結果総論と云ふは金と授出
一と云ふは次に起るべきに後述内閣のありが、今午の
憲堂加藤派裁大令とを以てしつゝの事論か
をと首班とする聯立内閣である、各各ある由に成
立をえざる事あり、勿論、何れも起るの事懽
運動心あるが、好の所から、憲堂等三十四人の後
友派あり以上いふを代表せしむる一閣ありあつ
てあれは、いふ所大抵の早急教正を推
す形勢であるが、聯合内閣のありは、急を以て

割ある閣あり、橋子が少く、閣を以てんことを
いふが例に依りありある、今憲堂裁に對しては、
大徳大高田ら廿一人取らば、きことを以て其の隙
隙を得て居るか、果してさう実とするに現はる
いあるるか、か否も決して冷淡のいふの如し、
後述のありは、或の衆議院派の橋子を以
てする位のこととおぼしめし、かゝる氣を
いふ有力な校友、且、憲堂一つにあり、此際余も起
つて或は加藤を説け、或は先んずと一校反
中の鼓者者を鎮撫せよと、此等切りの勸誘が来り、
自令して一校反を閣外で推すのは、固感があるが、此等
念心は、運動を為すことを好まざる仔細がある

飽きかたなりとある。とあるのをち山の侯に入閣の野心
がある。志きり、策しとある。利権をえんは物なるぬの
れが、早速教示を使とて加ふる。説かしめんとする
候は仕末で、早速心こんと閉口してある。他の有力
な憲法校友は皆適げを失つてある。が、先づ角斯
の野心のある候とと對抗の形をとり、自分まゝを表
面立つて騒ぐのをその校友未来の平和を破る。歴々の
つることはおもしろく、ある自分ハ今文の場合の
業と大隈侯に於て業とを擔任してある。が、其後
侯に脈絡のある仕事は、えんが着るも今迄指
續し、平和の関係を破ることの出来ぬ仕事場もある。
とるかとうか、冷淡な者達の出来ぬことである。か、推

幕のハ巻物として、世のことにきん、深更、長海、世と
増田とゆつて、予前の一時はまひかり、増田を先
角地として加ふる。あり、あることし、増田の中
団体、属してある。が、その校友の出身者を、関する推す
ハ、是る校友と同感ひあるといふを以つて、更とて説かし
ある。其取を、策し、此記ひある。昔、旅波の研、完全、今、
ある校友、松平、伯ハ、今、心、ま、こ、ん、と、不、信、意、ある
校友一人、関する推すことを同意し、加ふる。説、裁、申
込、ま、を、為、す。幸、比、校友の三、末、が、現、在、憲、法、の、幹、事、長、の
地位、にお、る。内、部、に、あ、つ、て、努、力、を、し、て、あ、る。が、か、ら、い、
ろ、く、便宜、がある。形、勢、ひ、あ、る。が、併、し、統、治、の、恐、ろ、く、
目的、を、達、せ、り。誠、長、を、憲、法、に、得、る、位、目、に、あ、る。と、ある。

まのが、此紙自分の業、比のと此際一旦悔心し、此後交遊
次の死者、招集を行ひ、加藤を望視する事、是れを
べし、此の感、無けんば危しと云ふ、此増回、此意を
念ひ、加藤を招く事、ことなかりし、思、留海を
等、増回の獨り、効力落し、是れ、余七行けと云
し、此心の、初末、ある、余の、辞、比の、前、揚、の、事、情
がある、か、い、ある

六月九日記

○又回書と通、一二古版書と得、

一十帖源氏

十冊

い、る、を、主、國、の、源、氏、に、お、さ、さ、源、氏、と
ら、ん、と、あ、る、此、の、十、帖、源、氏、卷、尾
に、改、め、る、こと、の、欠、く、こと、の、あ、る、也、也

十二

ハ、版、を、具、し、揮、毫、の、身、自、ち、も、る、事、と
も、も、東、七、不、の、め、か、し、あ、る、一、万、流、四
年、の、年、譜、あ、る、古、版、の、本、ハ、珍、と
ま、し、

一素問入式運氣論

一冊

劉、溫、舒、撰、の、不、考、入、慶、長、十、六、年、辛
亥、初、冬、吉、辰、梅、壽、重、刊、と、卷、尾、に、あ
り、総、丁、数、二、十、六、枚、上、中、下、三、卷、合、し
て、一、冊、と、る、事、也、醫、道、學、書、百、八、十、運、氣
論、の、醫、外、に、交、涉、有、る、し、卷、中、多
く、の、圖、を、挿、入、有、り、珍、本、也

一大ざつーよ

二冊

刊年を翻けよ寛永頃の古巻を存す
大宛書中の丸七なるきよきよきん美濃紙
本、一冊二冊ある枚許の丁数あり、圓
を缺く

二月九日記

○今津二の叔父五右衛門と山陽の者商一編を
示す、小作虎と本又ハチノ凡の要多を採す
の所、唯此續尾の例の其高口の印書を描
き出しある左の如し、こゝ殊とある所

ヤツコ豆腐、柚子醬油、厨下寒酸、見こし

四月廿六日、京都、瀬水、於國、狩呼
小の残、瀝、於以、一、所、而、也、備、以、冷

菽
豆腐の

菽乳未抽之嫩葉和之將西、寒酸
の所

小作虎

表

○屋代山賢自ら版下を去き、徒我々の續君年出
粉紙に収めあり、流布本の多き此方をえり入ん
所以ハ、此々異本あり、かゝるも、今流布本と對
照の違あり、前日屏出粉紙本を編ひしが、今又
単行本を得たり、こゝハ版式全れ同一なるも、下つ
ける、欄心の刻字も、是、藏本板刻し、徒
我々の三字を貼す、今、屋代の別記、此を
特に、単行の体裁とし、こゝの、
此者、屋

代の不忍文庫しの為記あり、文意中、朱點を打ち
付不あり、或は流布本と異する本を標示し以
るもの歟、傳の對較を助すこと也 六月十日記
○今の海り得る圖書の内珍るもの二三を録す

一 給事部言

一冊

葉名玉海著す所、卷首其書名の序
あり其書名 細ん字高の跋あり頗る稀
覓の也也

一 唐々言

雜解の二冊

松玉怨庵の著す 海解の二冊
稀しきもの也 寛延三年の刊行なり
…… こんろ珠書也 醫家以餘業するもの 該書著

一 七体七百首

一冊

富士谷成章が一起を上古中古中季
近昔、弟世南時自編の七体、讀み易けり
也 寛政九年の跋也 此本亦稀也

一 義経記

枕本 八冊

大正記源平盛衰記の枕本 珍し
きもの也 義経記の枕本 甚稀也
正徳收るも 挿 陰あり

一 元禄武鑑大全

三冊

半紙本也、火消しの部、消防方
行列の圖あり、此一特徴也

六月十日記

松島吉連(田原)の大家として知らる。此(母)唐之録ハ女の族
傳の字(詞)を女といふことよりして(醫)書よりあるが、本邦(國)を
中(古)未(解)し(難)き多くの(言)考(考)を考(考)論(論)し(る)もの
皆(こ)數(數)全(全)く(肯)察(察)し(る)る(者)唐(唐)に(ま)く(の)著(著)述(述)ある
人(多)く(此)方(方)を(知)る(人)少(少)し(殊)重(重)す(ま)き(こ)の(也)

○前掲北(北)之(七)体(七)首(首)の(北)之(之)と(冠)する(ハ)高(高)士(士)谷(谷)若(若)
書(書)の(聖)雅(雅)さ(う)り、(多)る(上)古(古)さ(し)南(南)時(時)に(あ)る(七)体(体)の(故)を
あ(ら)わ(て)ん(為)め、(左)に(梅)の(七)首(首)を(ひ)く

上古体 ねあふとあいつさうつらういひ言(言)流(流)こつ(つ)い(い)ふ
うめ(う)め(う)め

中古体 あま七(七)は(は)ち(ち)り(り)も(も)こ(こ)を(を)ん(ん)う(う)め(め)の(の)花(花)

い(い)こ(こ)の(の)七(七)と(と)ん(ん)せ(せ)と(と)り(り)し(し)て(て)ん(ん)

中(中)古(古)体(体) よ(よ)の(の)草(草)の(の)色(色)秀(秀)う(う)も(も)う(う)め(め)の(の)花(花)

一(一)つ(つ)さ(さ)く(く)ま(ま)は(は)め(め)と(と)こ(こ)を(を)い(い)せ(せ)め(め)

近(近)古(古)体(体) さ(さ)記(記)さ(さ)う(う)ぬ(ぬ)板(板)板(板)い(い)ま(ま)ん(ん)こ(こ)里(里)こ(こ)と(と)ん(ん)

こ(こ)め(め)こ(こ)深(深)き(き)頂(頂)の(の)春(春)こ(こ)の(の)勢(勢)

第(第)世(世)体(体) か(か)す(す)み(み)つ(つ)た(た)ち(ち)え(え)七(七)こ(こ)へ(へ)ぬ(ぬ)う(う)め(め)の(の)花(花)

お(お)七(七)ひ(ひ)の(の)外(外)に(に)る(る)ふ(ふ)あ(あ)梅(梅)こ(こ)の(の)

あ(あ)時(時)体(体) 谷(谷)川(川)の(の)水(水)の(の)ひ(ひ)ま(ま)う(う)り(り)み(み)し(し)花(花)を(を)

う(う)め(め)の(の)た(た)ち(ち)枝(枝)を(を)み(み)ひ(ひ)を(を)め(め)ぬ(ぬ)さ(さ)

白(白)創(創)体(体) よ(よ)う(う)は(は)ら(ら)は(は)ら(ら)は(は)ら(ら)は(は)ら(ら)の(の)花(花)と(と)の(の)梅(梅)

宅(宅)名(名)城(城)し(し)ら(ら)ず(ず)人(人)も(も)る(る)記(記)世(世)に(に)

彼(彼)ん(ん)う(う)め(め)の(の)花(花)を(を)見(見)よ(よ)七(七)体(体)の(の)花(花) 六(六)月(月)十(十)日(日)記(記)
第(第)世(世)体(体)と(と)あ(あ)る(る)末(末)世(世)の(の)体(体)と(と)あ(あ)る(る)因(因)に(に)伴(伴)光(光)五(五)の(の)心(心)

これに徴らるる七体和歌あり、書名ハ只念書
○六月十日神田の山本書店に左の一書を贈り得たり

一草歌彙の巻

唐本 八冊

此巻菱湖の舊蔵本也各冊印記あり卷
末朱書の目録あり各冊自筆の校正註
記等あり同郷の因あり余にハ食指動かし
るを得ず乃ち購ひ入る

補字
菱湖
自筆
五枚
あり

家宛既一回の圖書一本を為す此分古
賀巻漢の字澤を繕とるもの多き多くの
書入あり是れを以て六増換移動本の但
紙を異にしあり、封題の字も他一本を
要する折柄菱湖本を得字を幸いし

二本共、架中の珠とすべし
帙とありハの漢文題湯あり菱湖門人葉
松霞の珠とすし所とあり

○後後松尾若庵の著り言を讀む、後々、後々、今今
のよあり、遺忘の備りたるをたに、物かあり

- 一 鳥か啼りアツマと云こと或人云ふは徳の祝と
是は佳鳥樂の歌の本の續けたる詞也佳鳥
此節ハカケロト鳴キ又起キヨ起キヨワカ
歌ハワカツマと云ふをアツマと轉し東四の
縁語とすと此後志の也
- 一 逢坂山の井子カツラは今のセキタカツラ也畢

竟知らざるべの云いかけらん本末の明らざる
の事也しうしげとテを濁し漢へし、テを清
し漢めハ露見の詞うらま、此の恋の歌らん
が露見の戦い合の事

一 本邦皇位の御澤下に、子の字を着るも、徳
子甚意子杯是也。トウシ、ヨウシと云ふ
漢あぐし、皇后の澤に言うも漢よと云
こと台記に見えり

一 ヌッ緒の車ハ飾ハ五の緒付也今何ハ
御不車と云ふもハ五緒車なるべし
一 今野路の鈴と竟るもハ鹿土と云
撐と云ふ也、鹿土と云ふ者是と于指

ル揮ハ市中を振行く人其教をよめき呼
入んて葉末を求らる也本邦と云ハ梅鹿也
このハ笛を吹き行く也(四歌)

一 孝宗四河邊偶に勢ハ刺札と云ふことあり
是唐土と云ふ教を教つ時の柏子也

一 カキツハタを杜若に充る誤也カキツハタハ燕子也
也或人云ハ燕子をカキツハタと云ふ事ハ本
邦の古稱也今ハ葉末集のカホヨ草ハカキ
ツハタ也又古歌ルツハメラカホヨ鳥と讀めり
と

一 世ハ桐子の香煙と云ハ桜楓の香煙也此歌烟と
ぬるハ煙と云ハ又基礎の下と云ふ事

亀と意得ハ誤也、貝類頁と云物也

一 深山中大木杯に怪き爪付てある所、天物の爪と云唐土の書に萬脚と云ふ物と云山亀の爪也能く木に上る物也

一 神功皇后三韓征伐の時鎧の白目板に桐の御紋を付けし事、こと任去の記す者といふ

一 イナラフセ鳥の訓イナは妹也イモナセの略也ナセハ夫也、ラフセハ教也、イモナセラニハ鳥也、其の(名)をある鳥と云義也、日本私記にイナラフセ鳥を嫁教鳥と書けり

一 婿をナカラハスコト云ふことハ唐書回紇伝に傳に今婿半子也とあり

一 玄関ハ本寺院の移しと云と卷する関と云義也

一 唐土より来る物、物にカイキと云ある、福安府志に改撰の字あり此物と云ん

一 延喜式に絹或匹絶或匹とあり絶ハフシキ又と云今りのハギノ類と云也

一 世に素尊の像を鐘馗と誤り、林和靖の像を洒唐の天袖と誤る

一 カサキキは背星く胸下向し、取こ鳥と鷲とも合せる處付けるもの也

一 菅相公の松を愛せしこと、扶桑略記に見ゆ

一 唐土の書に半邊蓮と云ハ字あり、是りハ

時終の書けりかたつと云ふも也

六月十一日抄

○山陽寺間の書一通を承すものあり、出中林五のりり
に關すことあり、山陽郡の扶柁、もと左に寄す、此の
出中といふゆ者の、天保元年庚寅六月廿二日、印
子山陽殿すも前三年とす、(山陽の天保三年、(越く)
天保元年より、江戸大寺ありし、未と取浦のいと未
ありとんと、出中林五のりり、備出さんとあるを、
推す、し、為平の権治りの弟也、林五と役者を
比較して、家利家の妻ありきことを、言ふありき
が、此の間の神髓なり

六月十二日記

此の書一冊あり、書に、江戸、此の扶柁と名を
廿二日、天保元年、到着、志母あり、復常、不來
とあり、りりしとあり、保秋、冷とあり、又あり、
りり、其、實、本、後、とあり、又、扁、難、出、來、とあり、
侍、者、湯、茶、菓、彩、藝、とあり、此、取、り、取、り、思、
料、とあり、夫、士、林、五、氣、中、い、や、る、類、子、而、こ
難、耐、い、り、あり、一、奇、の、二、十、年、未、淵、絶、こ
故、文、林、五、人、焼、出、とあり、江戸、役、者、とあり、(とあり、
卷、内、路、滑、州、展、臺、とあり、積、を、南、地、とあり、滑、在、
ハ、ツ、シ、カ、ゲ、ン、とあり、合、面、叙、舊、とあり、切、り、け、り、地、林、
へ、七、て、集、り、とあり、中、説、の、とあり、此人、説、

此仙有江戸の情き物こ（世只の心）
 江戸とて多し二、家利家とす。其の
 一概ハ因一編出さるの役者るんを（因）
 音聲尾目とよ人（用）
 其概在書此也（其）
 陽先生の友遠甚是又因（其）
 銀堂（其）
 造（其）
 何合和舊の交之義歌在（其）
 口上回（其）
 論、後不終（其）

六月廿二日

曰為よの地居の情

詩二首

己鳴の 七ッ命助

例とて書るを 観者之欠何 此其を
 世にイキ在 中（其）

表

橋本吉兵衛
 龜山本
 高橋松之助

持心ハ御免後ハ御免
 此ハ元也

○早大出版部の事業状況は三割の収入を以て七割の利益を剩す形勢の前途は持続の又はあり唯此
 困ること、株税の増額、これらとて、これにハす、托
 して新株拂込を資本金増額びり、未りしが同一の
 方法を度、繰返す七め、而して新株者廿四四の
 株込を要するものあり、これにハす、一宗を得たる株主
 全員が出版部も全額拂込にねんする資金を借
 り受け、一時に株込を満ち、七十年半に亘り、その
 を年々償却することあり、勿論四分の利を出版
 部に拂ふとす、斯くす、出版部は課税の増額を
 を免かん、株主は全額拂込の責任を一時に完了する
 のや、い、毎年、新株拂込の結果として得る所の

配出七のころあり、此年加りたる学校切替券は
 のことと、年々の配出金を引、ある金を貸して拂込
 ませ、あるが以上のある、如く、出版部の人々と表
 向後の若干年入る、今此案を表に返り
 したるの内、減額を重なる株主三名の計算表を編
 記す、左の如く、大略推し得る

株主	株込金貸付	毎期配出	毎期償還	第一期利息	第一期手取金
早稲田	二八、五〇〇、〇〇	一三〇、五〇〇、〇〇	一九〇、〇〇〇	五七〇、〇〇	一〇、五八〇、〇〇
高田早苗	三、八七五、〇〇	七九八、七〇〇	八五八、三三	二五七、五〇	六八七、一六七
市島通夫	七、一二五、〇〇	三、二六二、〇〇	四七七、〇〇	一四二、五〇	二、六四五、〇〇
坪内雄亮	同上				

元金ハ十五期乃チ七年半ニ償還スルモノトス

利子八年四令ト元金償却ニ從ツテ五期通減ニ于
取金追加ス

これ八宝に極楽世界の方案あり、高法に抵觸セざるべき
七或ハ稅務署に於テ稅の方法と認められ知れず、萬
全を期スルニハ平素預金をもりし居る關係銀行と
協約し、出取部係証の地位に立ち若干の年數料を
拂ツテ拾カ七出取部の為すと曰々のことをなさしむ
るか、これ自分の案をいふも尚調査を要す 六月
十二日誌

○坂口五峰の遺稿を托し置きたる飯林袖海(萬下)
未訪遺稿の卷首に載てある序文の行成りなり
云々云々の情を目下句行に依る執筆を托せん

定まりしを勿れ大家扱つる序文なるん書くと依る執筆
を廻りける袖海横堀し依る依る序文を自ら心
りたりと示さる。尚ほ余と五年の關係上余の跋
を要すと云ふ、自分も七八語を笑望せ無けん。其
の言あり任かせざる所、自ら代筆を為さんと云ふこと其
言に從ひて一ニ言及んば、袖海初め
余を幼ひ来りたることあるん。且酒も四時を禮いろくの
ことを詠み、其の法詠中一二録す。きよあやう、袖海七重
也。あ(成高)に文を考へたことあり。成高の閱歴、精し。薩
藩に成高を刑せんとし、時これるの文を考へて
ことを考へし思ひ、成高に余をいひ、
問わす。君僕方人なりと云ふ、助余に得たり種子

ケ崎七個年流きなり、同じ崎に西御降盛の福せえ
在所八十二里七隔りなりと時、性来し隆盛を成高
詩を直して賞をいふらん、はなれお南に記せある
別りなり、隆盛より成高の二人なりと云ふ、**盛成高**を
誓居中島中の花虫家金井氏の花虫を帝に借
覧し七十年の修養、一層名を深からしめ、**成高**
より**初成高**とあ井息軒の眷顧を言け、**息軒**の
大い許すを、**成高**は碑文を必くも君を**成**
成と云い、**成高**の成高の事、**成高**の事、**成高**
細い成高島に江戸に出る後、**息軒**を記す、**成高**
時の**成高**を前にと同じく、大い**息軒**を凌
く言語ありしを、**成高**に、**成高**の事、**成高**の事、**成高**

る、成高の伝書と傳する時、**成高**の説を奉け
てあり、**成高**の事、**成高**の事、**成高**の事、**成高**
満々時代を**成高**に伝する能く、**成高**の事、**成高**
而**成高**の仙基の人、**成高**の事、**成高**の事、**成高**
成高の事、**成高**の事、**成高**の事、**成高**の事、**成高**
し、時、誰れも**成高**の伝を、**成高**の事、**成高**の事、**成高**
ハ名を、**成高**の事、**成高**の事、**成高**の事、**成高**の事、**成高**
部出、**成高**の事、**成高**の事、**成高**の事、**成高**の事、**成高**
ついで、**成高**の事、**成高**の事、**成高**の事、**成高**の事、**成高**
るを、**成高**の事、**成高**の事、**成高**の事、**成高**の事、**成高**
取り、**成高**の事、**成高**の事、**成高**の事、**成高**の事、**成高**
醫ニ、**成高**の事、**成高**の事、**成高**の事、**成高**の事、**成高**

新しき事と云き得たりと画家の筆雲近來何
感する所あり漢名者に注るや詩文もつあり初め、為漢
文の未刊のもの世にありいせん以て凡三十萬冊の次を
授かんことを約し、袖あり此四五の各あり各刊行す
へき圓方の校訂にありたりと云ふ、袖あり此任、林述
尚の文行するといふ

○袖あり活紙中、栗山の幅僅本七絶を高らし未の
七のあり、栗山幅をいふも真に上乘のものなり余
翁の者を愛ち見る所敢て少からざるも如此傑心、初め
て見る所真に念心のもの也、活紙、風後栗山とあり
印も同じ、活紙を刻し、活紙、楳田の印も捺す、印も亦
活紙の刻るること、めづり也、如此き、活紙と印も亦余の

如し又見る所あり、中、後書を結ぶせざるが例するに、
翁と目せ、活紙と云ふと活紙、顛倒他人と同じか、
雄健人を歴するの概あり、袖あり栗山の文に、就て活紙
日本に於て近世東坡を号ひたるもの、栗山と山陽と、
まう、東坡の文もひ難き、其の活き、おもしろ、二、
其の活き、翁を号する、見、得、多、くの文人、
是、翁、の、文、を、難、し、と、云、ふ、と、善、し、文、を、
この、い、言、也

六月十三日記

○袖あり日本に論活紙を注し、翁人も、
て、翁、の、活、紙、を、得、る、翁、の、
り、と、注、る、者、此、人、と、推、服、す、
翁、の、活、紙、を、得、る、翁、の、
翁、の、活、紙、を、得、る、翁、の、

此の巻を知ることありし。此人の著に論語新注若干冊
あり、頗る稀覯のよ也。嘗て早稲田の春日を以て
此人の論語の著述あることを告げたり、春日ハ之を
論が新注とて更なるを委しきことあり、一説を以
ていしと言ふに任せり、固ら然し、孰し元初なる若
也、自合と稱するに疎るるか、或も又、つからざるを以て
から此書の存するや、或もハ知れず、他人に書かれり、
彼等の心を以て汗顔の状也。 曰上記

○校友一人を謝罪し列せしめんと二三子とせしむる陣頭、
立つて半夜狂奔せり、甲斐又とせり、遂に目的を達し得たり
し、遺憾するも、加藤内閣の組織、安土の出来
也、内務大臣鐵道の三大臣、憲政の手は、帰し、皆其

人を得ず、他の二堂の首領、其の伴食の地位に甘んじ、
入閣し、其も亦甚し可也、二堂の首領、之を若し拒絶の地
位を欲し、之を承服し得ず、入閣を拒絶することあり、
是れ其の先づ、若し其の先づ、敵手、来せし
あるの要際也、此の大切なる、場合偏狭する、大義が直見え
る、居中調停し、其も、外務の人を
得たり、其時節柄、其も、
果しとて、若し、伴食を其する、誠意を以
つて二堂首領、始心とせば、其も、
十年苦節を甘んじ、埃風苦雨の洗禮を受け、
加藤子、其時、其も、面目を改め、其も、

其のつき短きを依然存するものあり、果して包容持續
の實を挙げ得べきや、政黨内閣の短所は日本に於て
内閣の崩潰を来するものあり、若し席温かざるもの
が、倒閣を恐ることあり、天下誰か政黨内閣各二位を
持てしもの、護憲聯合の精神は決して選挙と争
ふゆゑの方便にあらず、政策を行ふに於て最も肝要
なる、あつたことより出来たる内閣は護憲の誠意に出
ずんば、同じ精神を以て何より内閣の持續を固ら
ざる可からず、今度の内閣こそ國民を吉く實基礎と
して立ち立つものなり、元来を系怪物の擁護を以て
あらず、其の内閣を持續するもの、國民必しも大なる
後援を為さん、正しく懼る、莫く懼るべきなり

朝三暮四黨の反覆を著す、護憲の誠意を哀ふるは
伴食を甘んじ、二黨首、後より倒閣の因を為すこ
ともあり、其の感激と稱賛を四角を傳し、其の文
輿論の指彈を著す、内閣短命の責任は彼等、情
見

六月十三日記

○六月十四日坊間、回書と記し一二を辨ふ

大宰府天満宮故實 四冊

貞享二年乙丑九月、京の、格を刊す、不也
只原馬位、の若くは巻首、不、節の漢
文の序あり、梅、題、戴、天満宮傳記
とあり、此方何なる、幕府の忌諱、潮
九禁、敗とあり、故、流布甚あり、

此初年一括終焉木法字本の著者や之を
収む、此今珠本の一也傳入本毎本を卷
頭と天誦堂の古傳あり

一 舊鈔本老子河上注 一卷

奈良良聖法苑珠林の古本を複製し
之の也堅守許の本を零本と狩野直
喜の勘考の跋を附し、帝園号士波の
補助として一萬六千部印行の其一也
此鈔本鎌倉時代の鈔本に傳り本邦河
上公注の老子の舊鈔本此外も注家
花でし、この三四あり之を宋元以來の

刻本に對照する、明の英回あり、此の舊
鈔本も本文に於て刻本の誤謬を正し得
るもの少く、殊に注に於て最も多し
と云ふ支那の王弼注一時勢力を得て
本文も亦王弼注本にらし、其後とんが
ことき觀あり、河上注舊鈔本ハ老子の
後世の竄改を經ること尤も少く、老子の
研究の寶重なることあり、委曲に狩
野の跋に就て見るべし

一 八犬傳 二冊

淨瑠璃書六行本、序文を認る、犬士
八人旅やまてすくの夢を見むことを思

ひかりと清秋を用心今の人物ありつて
我れ其夢と記し全部八冊とす。八丈外
傳客中物と題す。と、えんを伝へて
此八冊中の二冊と見え、若者の何人
をも知らば、房の末に安政四のとし
舎樂百人成法とありて印を捺す。此印
のありを以て目推す。此書著者の自筆
稿本と見え、文章一も可る。の出来
也上巻より信乃演路の夢を載せたり
狂乱の如といふ、尾室の夢といふ文章
半夜夜遊、再今の段、いふ前
離衣、皆夢の段也

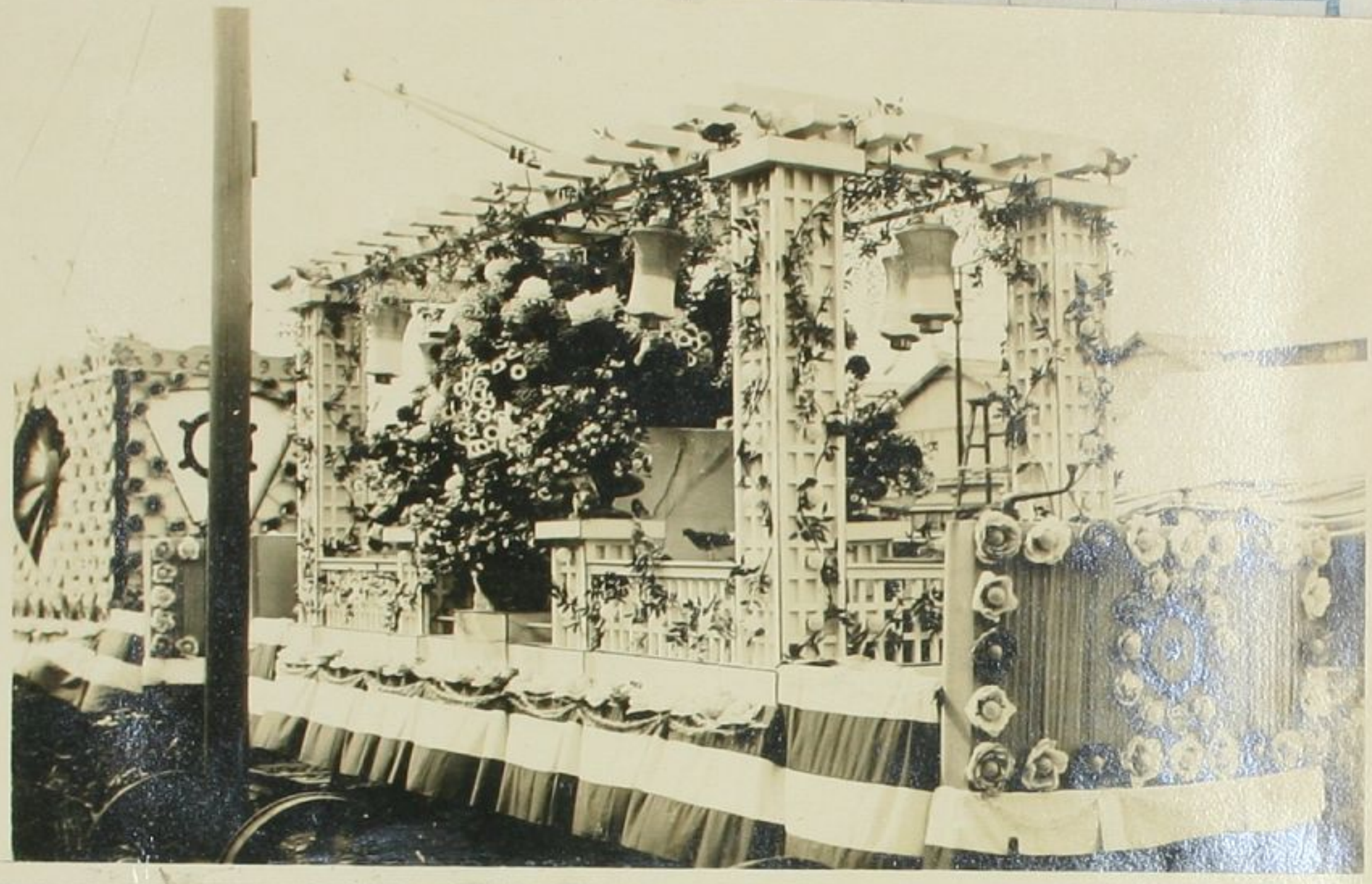
○東京御成婚を祝する為め市内電車に於て十基の花電
車を此の連日各區を回走して都人の目を嬉へせし。こ
れ花電車と云ふことは一再あるが、今この
ハズレといふ趣きを異うし、こゝのハズレの外面
は、模造の花を、^{（飾り）}電氣を装束し、位ること、花
電車と云ふものから起つたのであるが、今この人の
乗る箱に全く取外して、模造の上、特別の装束を
今、四時の山車に倣つて、能装束の人物を回走し、山
築い、花籠を飾つたり、趣向の山車を軌道に
走らる工夫は、十基連、此の區も、五基連、
此の所も、あつた、各基共に、此の念入り、出来、
の、美観人を、教、す、不、い、一、基、の、製、心、費、三、千

田をうけたと云ふから、十世の三萬石のつておふ、こんど
電車と云ふんら山車電車と云ふが、あるのひあふ折
角心つたよを祝ひ限り瘵も惜しいと考へたか、
時りるし七或る區に走せてお比と云ふか、自人の神田に五
世運移り馳まると云ふ、まの畫もあつたから、電氣
の籠くのを死ぬ、音楽をいをやり合はせたら一層面白
うからうと思つた、悲しく他日音楽も添ひのこむるべ
あらう

○近頃書物の標題……讚美……禮讚……云ふことが
流行と云ふに、稀書種本等の、紀念出版物は、道徳が提
へた書名(前掲の揚げまつ)ハ活字意と違ハるうらたか、其後
「敬書禮讚」の題を擬へて、これと此頃の流行の

道ふ名が、自分ハまを可うた、高層と書いて置くか、坊
に木村鷹大の近著「酒の讚美と其批評」といふ小
冊子を見れば、事の酒に關する所も、贈りて一説して、
甚だ多量の材料も著つたよを、又望した、此著者の
悪癖ハ、註解が多、あつたよを、あつたよ、但し
布版古紙の酒に關する記事、ゆけが較て面白、自
分ハ酒百則を考へたこと、お七、ろい材料ハ、あ
らう日本も支那も、あつたよ、あつたよ、あつたよ、
若者の酒に對する、清ハ甚だ幼稚と推して、(六月
十五日記)

○六月十五日 散策神田の書房を得て左の一書を得
た



一 神遺方

三冊

此書匠師士丹波康頼の家傳に傳へる日本
 上代の遺方より、文政六年刊行、巻首
 に丹波頼理の序あり、亦刊行者和氣
 義啓の序あり、書中の文は、主人の著
 業体名を以て記さる、此版附する、
 圓字傍訓を以てし、丹家本との異同
 を教題頭に注す、是、和氣氏の原本
 を底本とし、故也、丹波康頼の原
 序に見る、^(其次の)首卷ハ武内宿禰の定め
 し法より、^(其次の)卷ハ大に貴命、古彦名
 命の先り玉ふ所の遺方の法玉の神社

其四造縣主の家：傳りり字よとあり、或ハ
之んと偽書とちりりりありしか、和氣に序
：其の然らざるを辨して曰く

或謂此書方名與大同方同者居多、而所
傳及藥品或異、且其文體、非漢非和、
可疑者不少、恐是偽書、余曰否、文之非
和、非漢、或音韻清濁混用者、上古國書大
概如是、大同方亦然、豈特於此書疑之、其
方名與大同方同者多、而其所傳及藥品
或異者、則丹家之世傳、固與彼書不同
已、何必是彼而非此哉

本書果して和武内宿禰の遺方ならんを以

此類の書も古方の面目を具する所以ハ本書收
ある所ハ、難治の病と其治方ありありハ、風
寒病と其療法多クハ居ル、原始の病を
也、おのづから然らざるを得ず、和氣氏也此子
論及ちり、但し丹波家、傳ある間ハ、或許
補ふ所あり、や未だ知り可らざる、本書末卷
ニハ和名の外に朱筆を以てして漢名を附
せり、此者偽書のうとするも亦上代の醫方
を窺ふに足る、殆ど可也、あるも、我邦
醫方外國感化の爲り、或回か変遷本
邦固有の法、今得られんとするも能はず、而
七本邦固有の法、内採るべき特法敢て

少なりしをさし、本書の如き醫國を專業とする
ことありとありしとありし、架中にて花すべき也
本書為る集の執事あるを一種の味あり

○突如鐵道次官に任命されたる校友早速懇再昨日
刺来訪任官の経緯を詳述す、内閣委員に列し得たりし
染入を取つる犠牲と云ふの外、一たび勅巻より七卷
けえ一たび議入ると副議長の席を占めたる染入の
後不足する相違なく、背後に三十数名の校友同志
を有する彼れも七八回を對し七面目上受けかたき
任命するに云ふも、當初の役割、彼れを議長
に擬するも、その折会上粕谷
前議長に譲らるる如く、彼れ八回く

一昨の買浦是主等と云ふ加藤首相に呼ばれ、内閣委員に
任じられ、首相の内閣の組織に於て校友黨首を犠
牲せしめたる上、議長に校友に譲るを穩當とあり
て、選を始め他の者も別々異議を無ししが、扱て退
去せしむるに方り、早速又輸去用ありと云ふに托し
て引當め、突如鐵道次官とせんとの懇談あり、早
速に之れを當惑し、七回は辭したるも聽かんが
決三時間に涉り、早速に活版を得、能く至、一又の
懇考、協定を請ひ、その許さぬに、其間、鐵相仙石
七来席して懇談し、終にハ譲るを可しに、直る奏
進薦の手續を執らし、其に扱し、如何なる
心外ありし、其總裁と仰く首相の懇請するの故に

のことき、實は高橋入閣を旨んせしむるは犬養の入閣し
得ざる事ありしや、故に犬養の高橋を殺し、
狂奔し、伊東に代治を殺し、高橋を殺しめたり、
その内情を知るのが藤原義朝の初めと可なり、
當初犬養の高橋を殺す協調の精練も、
の相談をせんとし、時、加藤の例の油子、
百言、無用多、此場合君は入閣するや否や其の志を
を決せんか、是と言ひしといふ、亦犬養が攝政官の
お伺に時局の安定こそあれ、其のありたる柳堂、
藤七、加藤も此ことを言ひし、加藤は、
攝政殿下の御前、ゆる語りと、
の事、高橋も入閣と決り、
藤七も同前として、
十二

務大臣といふは、彼れ自身の實印を出して、
犬養の司法大臣といふか、加藤も、
通徒の椅子、想うる縁あり、
高橋といふ、岡田良平を文おし、
放流と對する策と、
高橋といふ、
部派に執力あり、又彼れの才、
長の職、
七言、
其外、
す、

巧妙を以て加藤流理七見上げたる院前也西園寺を以て
七級階の次中を見し意あり感し際約と逢ふ
可なりと言ひしとか
二月十日記

早速整ふべくして内閣組織の事柄をゆきき自分
のまゝと今更の内閣を初め西園寺の投票を以て
應ずるに出来ぬの元老共々其かゝるものとあつた
たゞ西園寺の北の内閣を擁護せ給ふるもの三堂何
れを内閣を内閣と破壊せ給ふるもの三堂何
れを内閣の敵とある。随つて西園寺の之を監視
せ給ふるもの高かき首脳七例の性癖を以て
無いと限らぬ之を直諫するものが無けんば
が早速君ハ其の人いあらう。役不足とか加藤自

七思ひ、君を犠牲に供して其の毒に思つておるが
君の直諫に「聴く」相違する。校友の如きは
も恐らく余と口説くあらうと云ふ

○信々木信徳が校本萬葉集廿五冊を編み終ふに仙覚
以来の大事業に昔の人が夢の如く知らうらうに古鈔本
が今ハ所在か知ん、之を借説して材料に供することか出
来ぬの如く仙覚時代より今ハ頗る便利がある。信々木の
此の編纂は「空前の」と云ふ程の如く、不幸にして此年
の震災に罹り、借入てある此多くの稿本と原稿の鳥者
の如く此の校正摺が信々木の筆に存してゐる。再び
出版の計畫をなするに、其の如く幸と云ふべきに、其
の計畫書より、冬、校正の書目や四庫の書の目も

載せしめたるは、本書巻の改訂に収めし四冊といは

以上の書目の内にある金澤本は葉集の複製を以て
九に此項坊間に出せしものと一説して、列蝶綴二冊
七上冊は甚に薄く下冊は可なり厚いといふある本
本に綴じて用紙は鳥の子に毎紙キウ繕があらつて
表裏葉も主派に出来てある書は誰の書とも法し
まいがらうしく勁板の香があらうとおもしろく能く
あらうといふ事とせざるは、徳定家の平安朝のものと
しある流布の著色葉集とに較べると異なる異同
があらうといふ事もあるを斯道の研究上より大切なる事
と見てみる。昔から古書家此の切を金澤切と
習くて或る部分の切り離せん徳家、珠花と見てゐ

る。例の半體を以て見るに、散らしてゐる上冊は
深いといふ事と、何故に金澤切と云ふ事がある
か金澤の前田家の花付とあるから云ふのか
七と金澤文庫の石花とあると云ふのか
云ふのが、確と云ふところ、此の原本のいつを
帝前田家、臨幸の事の上説に供し且つ献納
に及ぶといふ御府に入つてゐる。雷火を免れぬ
ハ何家の仕合にある。前田家、此本の侍らつてゐる
東暦ハ前田利家の遺夫人の遺の珠花とある
花と云ふ事と、此の時の前田家の祖考
澤の事を認めてゐると云ふは

○冷島為恭の下給と考へて聯珠百人一首は明治十二年

見ると改本の甚しく悪であるのは一教を喫した北の下
谷の原稿の友人小川為次郎が所持して北が、安田善
次郎が昨年の大火で一切の圖書を失ったので、小川が
田に之れを興ったのである。小川所持の折り本一説し北が版
本と對比して見れば先頃安田を助けた折が初めとい
ある。稿本は二通ある。一通は下書きで、記録の及故
にアラウッホリ書いたものである。一通は版下、元の字を
又洋書にしたものであるが、流石に名手の手腕があるとい
ぬる。また刻本と新紙とを見ても、筆致が古く山崩れとい
ふ。衣裳のシワもよく、筆の老ひ方のマルゲ差つて
無理をやつてゐる所が、ゆるゆるの、彩色も原稿本の

と違つてゐる。思ふに流るるうらむ、版本の七考のあり
精——
を版木の四——
のひあゝゝ、大半の失は、複字の想は、日あるの、名入
引く一線ハ旋全ハスキ字をやつて、そのあつて、
とのひあゝ、況して筆法を併いす、唯に形似に書らるる、
古しい精紙の紙を、生ずること怪しむる、是らぬ、
ハ原本と全紙筆、者を異りしてゐる、或る偽の巧者、
の下巻を見れば、疑と揮おは、下書きハ確々、
画る、利度凡手の心にて及ばぬ、
物程あるといふ、係し板本、
六月十日記

○昨の教兼中神田に精心得るたの一書あるを
一 夜嵐抄終 十冊

元禄十年の刊行なる、著者の巻末に
西行書とあるも果して西行の著るや
邊に判し難し、元禄抄の如説して
ハ巻数の多きことより、武士俗と佛教
の隆盛をうし、次の心を、此の二つを經
緯として、心う、大要ハ地獄の事殊
ニ觀摩王を中心として、佛典を引用
すること、事多し、而も慶長
前、の如説のこと、**田**佛の本位なるが
源平の事、其の武持の具界

又あるもの相合し、終に承久帝を擁
して觀摩王討伐の師を起し、地獄
を破壊し觀摩王を仆すの取心より、後
の氣の利きなる、**田**滑秋もあつ、元禄抄の
如説として名あるも也、徳の末の、大郡
の謗本傳出し、其が、えんハ其前記とも
見へし、給ハ細釋する例の宮本式
のもの多く揮入あり 二月十日記

○自分の圖書漁りハ日中行事ハ、震災後圖書ハ缺乏し
てあるかのこと、凡その人、實際とハ相違び、事實ハ圖書
の價が昂騰し、依來として、花書家の本と考へ出す
七のかわかるとある、**田**あまの圖書日ハ缺乏して居

らぬ。昨年九月地震の揚句三ヶ月許ハ在庫の繰入
から、自分と長石宛宛に圖書を購ひ得るうら比外
差から今月にも約七ヶ月計りの尚又得比圖書ハ
在书目録に載せ比より大凡ハ三冊と超してあり
る。昨年一月から九月に於るまでの蒐集の數に於て
る幾何か優つてゐる。自分の在书目録ハ三冊あり
が、此年一月から改め比より三冊の總計を納むと見る
と下る今月末ハ五冊に達する。此年一月から
今月迄十八ヶ月其内を以て算出する時の三ヶ月を控
除し十五ヶ月間ハ五冊を得比から一ヶ月に三十
三冊を得比割合に多し。乃ち毎日一冊を得比こと
あり。其價ハ購書歴に一一録してあるが今計

算するが面倒である。兎に角一部ハ十四位を最
高として十位以内のものも聊かあるが先づ最低
一部十四と見し、平均十五位とする。此の五冊の
價ハ七千五百圓と見る。實際ハ幾らも多からう。
尚ほ在书目録に載せるものも七冊から八千圓
位を越え、更に教へてみる譯とする。(六月十八

日記)

○宮島誠一ハ米津の人粟香と稱す。惟新の隆興
に奔走し、明治廿六年伊香保に岩を破り、開や往事を
追懐して絶唱三十首を収め、皆四句に肉施の隆
時の俊豪と未だの多し。聞す、中ハ大隈侯と同船
遠州灘を走るの隆興侯ハ今九死に一生を得る

礼を免るべき時来る米ハ開國の恩恵あるにせよ、之
れを徳とするハ可なり、彼れを仁人義人としと瞻仰ハつ
まむ^七山宗純 するハ非ざる、維新當時の日本邦人の米
四ハ心解する従来の如キハ^金癡漢の爲す所なり、日本人ハ
外四ハ救して飢りる正直に過ぐ、其の正直に過ぐるハ
やがて其の幼稚を白状するところなり、今ハ覺醒して米
心解して馴致せることの教への契入を思ふべき
時なり、先づ政治に就て見よ本来英四ハ之を以てするも
追々米風に移りたる結果ハ操節も信義も地^七ハ墜ちて
唯レ黨利を云ふのみ、今日も是れを苟且偷安國家を忘
る、^一こと近年の如き甚しきものあり、^二何とぞ
ん^七然るや英四ハ如斯ものあり、^三米化のありけり

何んぞや、思想界に就て看よ、淺白なる流は、^一の物
知り顔、一夜造りの廉價文芸、走り漢字の半可通、
溜々如斯きの風を、^二安す本の感見に流布して
實質の充實を、圖書ハ出版せざる出版するも
世^三顧み入るるハ、^四米化のあり、^五概々
質文的を、^六精神の、^七日銷磨し、^八去勢動拘、^九國有の國民性を
^十失ふを、^{十一}意欲せざるも、^{十二}米化の、^{十三}所、^{十四}也
金持跋扈し、^{十五}拜金思想彌漫し、^{十六}成金の、^{十七}車出を、^{十八}舞し、^{十九}稜
角の成功を、^{二十}稱賛するの、^{二十一}陋風を生し、^{二十二}米
化の、^{二十三}風日、^{二十四}米化の、^{二十五}風俗甚しく、^{二十六}頹廢す、^{二十七}米
化の、^{二十八}米ハ、^{二十九}島合の衆團を、^{三十}以て、^{三十一}國を、^{三十二}建てる、^{三十三}也

恰も我神國横濱函館を以て比すべし、彼等が奉ぐる大
統領、彼等回民の隸僕たり、彼等ハ自由なるこの故に
放縱たり、巧利ハ彼らが主條として利のある所ハ其の
赴く所なり、彼等ハ回を奉けて素町人なり、建四の
初の回民を統率する人格者あり、其の遺風夙成世が傳
はり、回ハ幸いニ失態も無かりしと云ふも、漸やく久
しきを以て回富あり、造人ハ所謂成り上り者の本
性をあらしめり、回際信義を以て其の願ふ所
あり、建四當時の精神、今ハ今もこびして、其の
の指彈を多く受く、殊にシテ何れも異なる所あるなり
我邦人の巧利主義事大思想、日一月に增長して、輕佻
淫靡如斯きもの、倣ふる我回風ハ日一月に巧利

主義事大思想を助長して輕佻淫靡の風ハ一世を
蔽ふるに、彼らが我を毒するも甚しいなり、近年危險
思想の新語あり、社會主義や無政府主義を以て
が如しと云ふも、米化ことを以て危險思想なり、
主義無政府主義を恐るることを知り、此の日又夜々浸潤
しつゝある米化の危險思想を恐るることを知らざるハ何ぞ
事哉、恰も夢裡解中、毒藥を嘗めて自ら其の害を
知らず、~~毒~~毒を盛らすこと、醒めよ、醒めよ、
醒めよ、醒めよ、
昨此を知ら、アンテ、アメリカニスムは大いに勃興を
可とする、こん米化中毒の解毒劑なり、
毒劑は、先づ解毒の地を醫術行動

なまし

六月十九日記

○ 薩摩藩平袖海と稱す仙臺の人支那の文を音ひ
血体の文を善くまゝ五峯と交り、余も五峯の生前一回酒
席に合ふ、五峯の詩福の教正記を托する、此に友三が
面接す、此次初めて来泊、豊崎子郷の論修新注を
又んことを欲すんとも稀親のわろも花者すしと云ふ、余
早大波花の本を貸し、其の波花本ハ論修新注に
浦抄の二冊添加あり、近代理音の研究家此書を
以て論修注の冠冕とす、此本も多く傳はら
すと見、今右に袖海の筆蹟を収む

春城先生

春城先生老閑日亦持筇山水款待を
有る、御題 浦修新注の示るる山風情
萬ら松葉録の作、山行、定まる年、老記
、際平今日、好得、一陰、空、古、年、一、正
松の、叶、音

生安寺の竹の石

佐藤宗孝

六月十九日

日本は面積狭小なるが、國民大教思想を以て大教の
 故に、播種するに、狼狽するを併せ、併せて、世界戦
 争に於て、物資の供
 給を我々の必要とする
 こと急ぎしむるもの
 ありしに、師の大教
 思想を以て、日本は、
 大教の捕虜を収
 容し、捕虜の巨額
 するを、格別大

世界の自動車數

一萬臺以上のみを擧ぐ(昨年末現在)

米 國	一五、二二、六五八	日 本	二五、〇〇〇
英 國	六五五、三九八	スイツアーランド	二、〇〇〇
佛 國	六四二、五七一	露西亞	二、〇〇〇
獨逸	四六〇、〇〇〇	ネザールランド	一八、四八九
オーストラリア	一五二、〇六八	ハワイ	一八、四二八
アルゼンチン	一三〇、五四〇	ノルウエー	一七、六八一
伊太利	一〇〇、〇〇〇	フキリツピン群島	一五、四〇〇
白耳義	八二、三五七	マレイ半島	一五、三二〇
スペイン	六一、三〇〇	ポルトガル	一四、六〇〇
印度	六〇、一九四	オーストリア	一四、〇〇〇
ニュージーランド	四八、六二九	ポルトガル	一三、〇三三
英領南阿	四四、八六四	チリ	一一、〇七〇
スエーデン	四〇、二〇〇	チニコスロバキヤ	一一、〇六二
東印度諸島	三六、六二五	ルーマニア	一〇、四〇〇
キニバ	三二、〇〇〇	支那	九、七一一
メキシコ	三〇、〇〇〇	爾餘各國合計	九、六六〇
デンマルク	三〇、〇〇〇	總計	一八、二五〇、四七七

数日と云ふるものありしに、名譽を以て、必りセヤツ
 ト通信の途を共にし、其位を以て、東洋の故、コシナ大教
 思想を缺く日本と世界戦争、よい教訓を以て、初め
 大教教育を受けたり、而して、終るに、教が、大さく、實ハ
 グラスプ、すまゝ、難人ト云ふ、唯此大畏侯の如き、故、
 思慮を以て、既味を有する人の、又満足し、る也、其の人の
 思想、大規模の性格を有するもの、日本の、何れ、就
 して、其、教、約り、よ、り、を、常、に、物、事、慎、ら、す、感、し、た、ら
 ん、其、世界、戦、争、を、以、て、此、人、の、ハ、の、く、も、満、足、を、思、つ、た、ら
 ん、お、違、り、昨、年、の、大、震、災、の、如、き、七、世、界、戦、争、も、如、く、日
 前、に、大、教、の、教、訓、を、以、て、終、り、焚、餘、の、灰、燼、を、以、て、片、付、か、す、
 片、付、か、す、邊、際、の、四、五、を、為、す、こ、と、き、ハ、其、の、一、端、を、以、て、

運搬機関が此の大教に應し得るに今片附切
んてさるる而して此の運搬機関の才教を^現通帯
の状態をさるる見ても如何に我邦の教の^{規模}の如何に
し、先南大教思想に我邦人の度量を大にするに必
要あり、勿論殖産経済に大教を^目實地の目的とせ
さん心固高に大なる能はざるも、爰に掲ぐる一表の如
き、我自動車の教が如何に欧米に對し教を^於たせ
ざるが^{さる}かを^説的とするものなり、何れ^れ也
七彼我の^教大なる懸隔あり、我邦人の教の大なるを^又歩
^たし之れを^教馬^はとも^廣み^て我^の不^を愧^つること^を
知らず、^教く^も七^寧ろ^塊ち^よ、^塊ハ^進歩^の^軌道^を
他^に感^ずる^所あり^此説^を心^す
六月十九日記

古来日本に比較的大教思想の教習を受けたる僧侶
侶にあり、佛徒に説く教は絶大にある、人の慈愍の
及ぶ難い程の大教ハ久船に説かんとするが、實に出
船目か多い、併し出船目多るも、僧侶の氣宇
を大にするには、^其の^力が^あつ^ては^譯が^あら
う

日本ハ^最嚴^重なる^やゆ^ひある^のに^相應^して^ハ細^か上
手^にある^方一寸^のも^も式^千春^のの^動物^を彫^刻す
ること^も、^ハ敢^て難^しとして^るの^ゆ支^那に^絶大^と
云ふ^ハ、^其の^天壇^と其^の園^境を^必り^出す^能ハ
無^い、^況し^モ埃^の、^ロウ[・]ツ^ドを^必り^出す^能ハ
る^の、^由来^需日^要の^教が^少なる^のから、^{ハン}ト、

る所があるかと思ふから、心のきこえを言ふて呉んとの依頼
で、昨りから漢文始めを専ら扱ふが漢文も足らぬ自
分を亡反り山の中流が古河の顧問であつた關係から
古河の事、早くも身を引いてある。昆田が山崎の死
後代いつて同社、其の課長時代から理する事とある
た今日まで、いさぐの成る古河の事を身もしてある
成る昆田の為り古河に援助を與へたこともある。
乃ち續き、件で大なるを政府も命を乞ふ折、
自合に改進黨の毒を負つて歸するの祝宴案に出張
し、この事もあつた、今の高直を男爵とする時、自合に
主として大隈侯、後して成切せしめ、このこともある。そ
へる縁因があるの、此傳記のあつた興味が無い

を以、別して古河が小僧役、在つた頃の事、一向親つて
あつた、昨りも漢文し、此部分もある。
殊と初身の事實が多くある、古河市兵衛ハセと
木村姓、江州の古河某の養子とあり、養父が
小僧に仕へてゐた關係から、彼も七三に投すること
あり、二十年七小僧の役を力をおこし、小僧役の事、
其末の中樞として終始し、あるや、彼は為替と終と
と業務としてゐたが、古河ハセの方を擁護し、一時ハ
三井らも七年度、業務を擴張し、多くの鑛山をも任
せし、餘りも年廣くやつたの、政府の注意を惹き、
その終極を惹起し、位であつた、當時政府は無抵
當心為替業務を言ふた、其放漫のせり、ハセ一朝改

府が敗政救正の必要から、抵当を要求することゝなる
こと、中世の~~中~~ハ、そのことか出来ず終に瓦解
ニ及んじ、政府の追及ハ、如何にも急であつたのみ、中世
ハ、如何にも~~中~~が、無つた、政府ハ、中世の全盛を
収め、その苛刻も、用人の類全、土地の賦課を
七没収、日積し取扱を~~中~~、此の厄難ニ過つた、古河ハ
あの四十二の厄、前夜であつた、彼ハ、既に大
なる事業手腕を有し、其の頗る大規模の業務の
経験が、あつたのである、彼ハ、中世の瓦解と、
江戸の善い家から、離家の交渉を受け、彼ハ、自
ら、進んで、離家を決り、其の~~中~~、古河姓ハ、
これ、折角此姓ハ、人々、~~中~~、これを棄る、~~中~~、
十二

す、とある、~~中~~、彼ハ、陸奥、宇克、并ニ、
一との関係ハ、中世の時代から、~~中~~、
から、美あ子と、~~中~~、
中世の瓦解の後、~~中~~、
此名、~~中~~、
古河との関係上、~~中~~、
感ずるのみ、~~中~~、
山形、~~中~~、
平田の、~~中~~、
公、~~中~~、
萬、~~中~~、
共同、~~中~~、

茂瑞公、木村尾也七を鎧長とししが、幸ひもその成印し
比、ゆるま相馬藩のひとやかましい議論があつて、二藩の
の出資元戻しの請求が起り、古河と再び遊軍の牙
一筋行の援助を得て、その通印しを、あつ成結が
奉るのむ、相馬藩の七前津を悔ひ再帰回を
込入比か古河と之れを拵み、足尾を任置する後日、相馬
家を其の協同者とし比の八、日この縁因あることあること
ぬまのここと、余の今も、知らざることあること、つぎ侍
記の好むを、後み始めを、このことあるハ、特におおろ
く感し比、その好むもある、出来てゐる。或向者さ
互し比、う、ま、心、同、後、主、つ、む、あ、う、う、
足尾相山流革の項、一二抄録すべきことあり、徳川

家原の嶺山政業、う、て、見、る、へ、き、山、例、五、十、三、條、の、内、
一、概、全、心、名、城、の、下、う、う、を、鎧、う、ち、有、之、ハ、採、掘、不
甚

- 一、山、師、全、堀、河、の、備、を、野、武、士、と、勤、事、し
- 一、山、師、全、堀、河、の、儀、ハ、閩、所、見、石、一、通、う、る、を、可、お

通、る、
一、山、師、全、堀、河、の、人、を、殺、し、山、内、に、馳、け、込、ち、も、留、置
仔細を改め、如、つ、う、う、う、う、山、師、全、堀、河、の、助、吹、白
お、ま、ま、つ、留、置、相、働、か、せ、可、申、う、

足尾相山の麓、見、乾、し、
安永十五年、足尾郷の農民、流、即、並、に、内、務、の、お、人
が、峡、口、を、流、れ、出、る、流、川、の、舟、の、毛、の、女、の、名、の、こ

ある人の役を罷りあて高利貸をしておた、取り金を
貸金借金の手帳をしてさうさう他人の企及
し得るの根氣ある手帳をあらう。此の時分
盛岡の八波池の支店があつて、その年代も
印まんと、まんと轉し漸やく、その店の高利貸を
さう侍ら、自らも高利貸を試みしか、何れも
波池支店が急こ引揚ふことなうさう取付
けが起り、此時も古河屋の雲一家のめく増集
し、此の時人と言評をする、難儀の漸と市
閉店後盛岡の叔父の熊治さう古河太
郎左衛門の養子とさう此の人ハ江州人む、此
頃の番頭、福治の支店長をやつておた、市

兵衛が古河姓を名乗る如き、此の時、あつた、
古河の養家、養女があつて市兵衛ハ其
配偶とさう此評、此と養女の折合があ
しく養女ハ終、養家、戻つた、其後養父
ハ中風、四推し、親代つてや、此の位、
あつた、追、主身、手帳を振ふ、おた、
さうさう高利貸をえること、上手で、金、
息を穿つて、ホマテを、まんと、以つて、婿、
おひさうさう、教、教、をやつて、養父、疑、
こと、あ、後、養父、金、出、所、を、
し、高、養、養、子、叶、ハ、女、と、許、さ、
〇〇年の書、此、回、之、後、標、養、集、ハ、一、頓、挫、を、

奴、そんじから漢字の方が無九ハ、若葉と真
：解すことか出来ぬ契沖の如キハ之の
為め、最初の好むところ、ラント文集より
典例を擇む、まゝの胸を振へて例の代近
記を書いた譯比、作と木に、ほまひ、漢字の
力が、全いかう、真の解を、心り得る人と云ふ
奴云、

仙光の若葉の物、何と云ふと七層葉の
オーソリ、いゝ、鐘合時代、いゝ、か、ま
比、いろ、の、古、本、が、あ、つ、た、ま、た、ま、と
ぬ、を、冬、照、し、の、ひ、か、う、廿、今、日、得、え、る、の、林
料、：、振、つ、と、あ、ん、丈、の、ま、か、出、来、ぬ、

土依の庶持の萬葉古義、庶持、元馬
井の流を汲む、いゝ、昔、一、乱、を、廻、け、七、土、依
：、落、ち、比、公、家、も、い、ろ、く、あ、つ、比、か、元、馬、持、も、た
の、一、人、い、あ、る、庶、持、田、舎、と、是、を、考、へ、る、を、い、ふ
欠、い、比、か、う、多、の、缺、點、も、あ、る、が、形、る、大、著
の、あ、る、の、ハ、先、祖、か、う、受、け、れ、血、と、椽、の、ま、い、び
あ、る、亦、そ、ん、か、宮、内、省、の、花、殿、と、る、つ、比、一、ツ
の、原、因、ハ、あ、る、井、の、子、孫、の、他、比、と、云、ふ、故、に
も、あ、る、い、う、

一、貝原登軒の大字、府天満、書、傳、記、ハ、何、の、為
め、の、傳、説、と、さ、ん、比、か、と、云、ふ、余、の、考、へ、る、所、を、對、し
書、院、に、多、分、あ、り、大、字、存、在、の、多、や、其、他、を、考

しく考へるべきに為めありと、其の事ありき
時、悉くあることが忌諱の一件件にありしこと
ハ紙後じやあ其の心りは細圓が精也
と云はるるも、此の傷犯をサット讀むるに
七列に徳川氏を諷する所あり見ありぬ、恐
らく大宰府のことを飾り出さるべきに、
永因にあり、後世より絶版の理由を知
るの困難ハコシナ事、原因にありからん
一、雪葬と山陽の親友にあり、その交を掃し
あはれ、端は、どうあり、つか、
比がいまい、委曲か、知ぬ、南條文正ハ其
宗界の人にあたり、その流を掬つと、最初ハ

陽ハ雪葬と交えんとし、得志の楠公論を
撰り、其の事ハ、雪葬ハ、
ハつと、
か、と、
ア、
が、
ク、
お、
端、
逆、
條、
いと、

六月廿二日記

○五米利加 國産の果酒と合食し此物の流しにアメリ
 リ加七禁酒を断行し此結果は余々何と云ふも持毎
 沙汰と云ふは、まことに酒の代りに煙草を喫することか
 ヒドリ行かん出し、一毎に煙草をボーイが持回る様
 あり此と修つた、いくら禁酒と云ふも酒力あると云ふ内
 家より飲もしゐるが、公認受ることか出来まい為めに
 下級社会は、現金を所持してゐるが、前のごとき、
 パーティーに入りて簡便に飲むことか出来まい為
 め、事實禁酒令は、此社会に断行せんとするに、
 つゝ家庭の凡波も穏かにするて、いくら貯蓄も
 出来ると云ふ、極物む、此方面よりあるも、効能を
 究せんと欲つた

○昨の坊間の一書を購ふ、署として四鳴輝と云ふ、的初年
 は、刊するも、卷首白序居士の漢文の序あり
 次に換詞引あり漢文をもて吾々が漢文の流革を叙
 し詞の要を得る、卷中、雅楽二篇俗劇一篇
 傀儡一篇通して四篇を収む、四鳴輝の署ある所
 以り、目錄左の如し

- | | | | | | | | |
|----|------|---|----|---|-----|---|----|
| 雅楽 | 惜花記 | 生 | 宇盛 | 丑 | 切手刀 | 且 | 瑜珈 |
| 曰 | 扇芝記 | 生 | 頼政 | 丑 | 行信 | 浄 | 僕 |
| 俗劇 | 後松記 | 取 | 笑 | 洋 | 土 | 老 | |
| | 失心吟行 | | | | | | |

而していまじ狂歌也其歎の集を得てしむ、此の初
めて其書は秋集四冊を得たり、敢て珍書とあてて
と近身へ手入へり難きとあてりし、此の文化
十年大江の類の序ありし、四冊目ハ其歎の特
者なきとあてり、并に逆しとあてりし、門人が惜しむ
て採録し「河のこつみ」と号して併せ刻しとあ
也、狂歌集中、此人の集を瀾き難く可らざる如
し

六月二十三日の記

集中の狂歌ニウ三ツ

帳中涼命

あつちあつち扇の風ハおえたらし
山江飯帳にも
せい波をよめる

新川集

舟屋の一枚下地紙をむ

えりし松のの炎をゆしむ

洞屋の巻

葉のこもる光号のこもる梅を

谷あところの琴をぞえり

春雨苔縁

あつちの花の錦をこもる雨に

はせと苔のさしし波のよあつ

夏旋

あつちハ夏の原の草をいませ

あつち外へ風をよめる

堂の居此蚊柱梅の事
敷ふげに儀の塔をや出さるらむ

暮ごとし蚊の木やういふ教う
古梅の事とつる事を

うたぬめ能廊もをたける皆ふらむ
十あるよとまてばよそく行教う

海菜

蛇の舌花う出しを海菜の軒

軒かくごを交しをかーと

虫糸

盃七石にさかまよ手ふを袋の

降るも歌のといこあるか

汐干

汐干狩あみしひらぬに投るん

我々く片身里く那うとて

○近世萬葉研究家休木如³⁴の著木村正辭
此八余が帝大に在りし頃萬葉の海を撰録し
余が七其の教を受けたり。其の末木村(正)
の萬葉研究を継承したることきかぬ。其の本のこ
と却つて世に著いれず。保存する者あり。其の著述
あるも、まゝ七刊行せんがにぬ。六月廿三日記
○麻布の林木町に附近に奥津尾といふ刻有る衣あり
井上炭生翁愛顧を垂人々とて、其の別世東照

津又ありしと因み此名もあやふしき受けり、八廿の割賣
の美を脱けぬも余ハ未だ到り誠なりしこととす、
是此改行を牛馬を喫し、其印しごとを報す、
此家の油肥ハ濃厚に失し、田端の自天軒らも下入り、
家も狭淺くして二階の梯子を立入らざり、
を感するもとらう、
地味地味のうき所、無記の家を
言ふやとありし、
動車の地味者の此家と常々振湯と、不快の感也
り、但此此家、珍をよきハ窓面位のことと歎とらり
る、
多額面と聞くハ西御降屋も、大久保利通、二字を
第一通のとおし、
合丸印慎し、
美宅を心すこと、
美殿を美

すこと美宅を甚だしくことと自ら深く戒めてゐる、
若し此等の言、
格と素襦、
ハ供用を糸する、
少多し、
こちんことを期すこと、
口出入り、
刊行を、
あつあ左に、
のり、
まを、
若し未だ世に出、

六月廿三日記

午睡せせむ二福心のせめその頼業可
方のいふハ改梨歌をてりてあり

六月廿九日

亦書

母上終
後一回終

あまのり花をきこえ方候より教
しおこぬと終ありて
節は言アルキワル計化園
○白檀をよじし候し山を洞なる
上じしあまのりともは昔
ハ上らん

○後刀五後とてり候

此古前之内に後一の後妻を申ふ急ぎて漢の
可らすとてふ高山陽京都と設けたり才子辰花の
ハイアルキ、ワルサとわすこととてふ、此等も推直
測する、此者物を申ふ、六月廿九日、文政四年
山陽四十二の時のつづし、候ともん、辰花を
前年(文政三年十月)生れり、次年はハイアルシ
位ニ生長の完也、高は後一の後妻ありて、富士寺
川花司馬の妹白平を娶り、二年(文政五年八月)
つづかぬ、その中間と推定するのあらう、後一の
初方の妻、ハシ浦士、由勝馬の妹、阿らう、文政三年の

三月二十日要の所より、何れと云ふに其離心は十二月
十二日とあるが、約一年の離れおしる也。その事柄を
詳かざるを得たべし。後妻を定むる事と二が子
間よりぬれ、急ぐ可く事といふ。往年自家の離
縁の情を思ひ、念ひせしむるべく、高床の御
前講義の誅判より、栢の余の偏執、抑々、其
事仰せ付け、えんを長きこと、これにいつて、内
：失体あるべし、さうぬと、その亦自家の前行を
追憶して、~~そ~~を憐れむすを欲せざる故、
春の遺、福教、此の頃より山陽へかけ、
春の交つる、注家との和歌、の詩を、
へる、必要を感じ、いつくの者、歌を、
注文するや、

二叔と姑

萬子、西木山、竹山、二海、栢里の原、待也、
其の和しむ、待、或、春の、雜、中、
也、或、或、或、或、或、或、
と、或、或、或、或、或、或、
ある、流、山、陽、の、
一、折、回、を、
中、是、出、
この、材、料、
中、る、流、汗、
努力、
餘、一、
の、互、

六月廿四日録

の爲る所前講義の如く、標本を缺く激紙の言
辭が、何れに、満腹の由を、誤す、そのか、あつ
た、その誤解を、捕獲する、満腹の、故、一、か、犯、の、か
と、し、立つ、その、故、一、か、犯、の、か、あつ
その、態、一、か、犯、の、か、あつ、その、得、る、こと、と、あつ
た、その、故、一、か、犯、の、か、あつ

の東京の帝後館、目の開か、今の佛堂、西美術展迄
今、到り、観、彫刻、佛堂、その、故、一、か、犯、の、か、あつ
卒、の、進、退、その、故、一、か、犯、の、か、あつ、その、得、る、こと、と、あつ
感、服、する、能、い、その、故、一、か、犯、の、か、あつ、その、得、る、こと、と、あつ
や、進、退、その、故、一、か、犯、の、か、あつ、その、得、る、こと、と、あつ
その、故、一、か、犯、の、か、あつ、その、得、る、こと、と、あつ

品七種を扱った、その、故、一、か、犯、の、か、あつ、その、得、る、こと、と、あつ
を、其、の、故、一、か、犯、の、か、あつ、その、得、る、こと、と、あつ、その、得、る、こと、と、あつ
書、や、描、吻、の、男、女、裸、体、像、その、故、一、か、犯、の、か、あつ、その、得、る、こと、と、あつ
九、品、七、種、を、扱、つ、た、その、故、一、か、犯、の、か、あつ、その、得、る、こと、と、あつ
一、説、一、か、犯、の、か、あつ、その、得、る、こと、と、あつ、その、得、る、こと、と、あつ
二、三、の、品、七、種、を、扱、つ、た、その、故、一、か、犯、の、か、あつ、その、得、る、こと、と、あつ
ハ、流、石、一、か、犯、の、か、あつ、その、得、る、こと、と、あつ、その、得、る、こと、と、あつ
認め、え、ん、た、何、れ、に、比、考、の、品、七、種、を、扱、つ、た、その、故、一、か、犯、の、か、あつ
こ、を、許、す、こ、の、故、一、か、犯、の、か、あつ、その、得、る、こと、と、あつ、その、得、る、こと、と、あつ
ハ、考、す、観、覧、せ、し、る、部、分、に、あ、つ、た、その、故、一、か、犯、の、か、あつ、その、得、る、こと、と、あつ
を、記、す、此、像、ハ、何、れ、に、比、考、の、品、七、種、を、扱、つ、た、その、故、一、か、犯、の、か、あつ
の、人、物、も、ハ、映、画、に、あ、つ、た、その、故、一、か、犯、の、か、あつ、その、得、る、こと、と、あつ

ついでに... 相違ありしを... 藝術と孰れ
に著し之を感と意記す誘因を忘すべし、映畫に
是ありきまあるや、吾故に察の時代錯誤蓋し術
上の不理解、を更るる一笑すべき也、二月廿四の記
○昨の又二の圖書を辨ひ得たり

一 延喜式

六十一冊

此大部の書、務く余不しき書後、辨
ふべきことと感しき、従て此書を卷
考す、卷考ありて終に辨ふ、平安朝
時代の制府のふの儀、現今存するハ
うぬきことあり、此書ハ文政以後、雲州侯
と檢う、正本刻せん、校考異十一冊を

深く考、余の獲得ハ此者也、此書ハ永
久に必要ありと考す

一 清問鈔

二冊

一 舞鶴印譜

二冊

前者ハ清問鈔の刻す、巻端に成山馬
風卿とあり、歐書の序あり、印ハ支那
歴代高僧姓氏を刻し、之を以て
各印の注、刻者の白あり、余
前月、續清問鈔、二冊を獲て、改
刻す、花可、此二冊を保せん、定印
と考す、
二款の印、仔細切り、授きある

一 舞鶴印譜

二冊

後者より取戻の印譜舞鶴賦全の編を今刻
し乃が故に第して舞鶴印譜巻首林信言
の序あり、其序中、高取戻の名字を云ふ
曰く家道字子正と、畠保細と各印を換す
るに、刻の古しゆるをも云ふ、南時刻者
の中、かくて月旦せば、蓋し上級と位見
いとう華胄畠家家の祖傳小のふ
のありき也、此人、尚ほ他の印譜ありと云
けども未に見す

一本朝詩英

五冊

寛文九年刻了所、巻主林祭酒忠并
小の竹洞の序あり、柳谷の字芭の景

一 先子本義

上下合一冊

享保十二年、近藤菴堂隱の著了所、
本邦先子研究、最も深く、其注七頌の
識見ありと、斯る者、向て重んじ
る、自序に據るに、邵并が先在彙注
に採り所の多しといふ、此書稀難
也

六月廿六日記

○昨夜久遠美東島に招え、新島お同志淑貞と共し

柳橋の電法に合す、偶に湖を多分の為の行のぬる
區の選を巻謀七出京中とて北等七十数未合他
人をして招く来ん、新の勢を親臨監に任じ
急法由り、勢を親臨に任じ、因は、
會外三木武吉、新の親と起云、関係あり
と報を來合す、三十名びりとの、
多くある人、身の家郷に在るの思いを、
法七其所在に七若かりし頃、
懐のしく思はん、
下道了、
とと大なる、
今この親あり、二軒の内、
十二

い、
使りの離れを、
あまの橋、
の音、
地、
を、
こ、
語、
ま、
の、
弟、
殺、

何れとて

絶倒す。余支を終り、神宮選本識文連を願ふ。又、
かゝるもろく、先猶う、染ん晴、花君選者後
の大晦日を皮肉、とらふ事あり、と笑す、六月廿六
日記


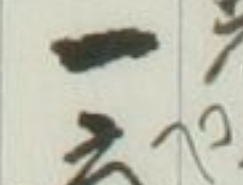

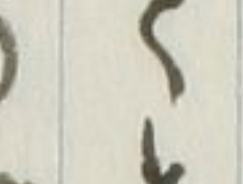
○高橋義彦、其孫、故年未給、景中、二、
後史、こゝき種と、後後、とを、少く、あ、未、外、に、
史、之、飾、り、と、多、く、ハ、名、傍、の、多、く、城、後、の、
事、雪、村、友、梅、や、云、能、知、方、の、城、後、出、身、
あ、る、既、に、内、か、ら、る、る、事、も、あ、る、が、行、基、
ハ、大、潮、
ハ、亦、城、後、出、身、
も、り、し、
果、
北、二、僧、ハ、
生、ん、
と、
二、

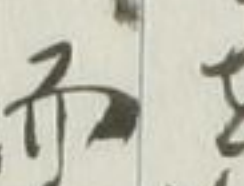


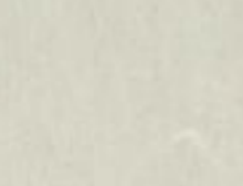


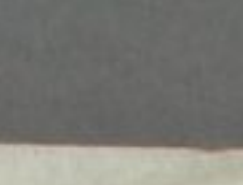

傳道、の、る、
福、
骨、ハ、
靈、
ハ、
美、
の、
可、
ハ、
す、
若、
九、
二、

りとうる事と思ひ、此婦人の高性未だ幼
く、或は既後出身とせん、知らず、夫は角
切の事、其の因あるにん、此と珠也、乙寶寺の
縁起、信喜物の原を、今何れにありや、印を
す、或はたゞく、尖せ、歎、廿百、流布する、丹
鶴、昔のむ、納め、ある、この、又、今、現在、乙寶寺、
ある、縁起、ハ、文晁の、ハ、人、長、多、武、法、が、本、心、佛
事、も、亦、一、常、不、持、七、し、給、本、を、基、と、し、ハ、文、晁、の
畫、し、は、し、の、し、ハ、文、晁、の、題、後、も、あ、り、と、か、何、人、し
手、り、ハ、文、晁、之、れ、を、持、し、は、し、の、か、余、り、威、家、西
全、丹、美、氏、が、置、き、は、濡、佛、ハ、一、の、の、の、巨、心、な
る、り、判、し、武、丹、美、氏、の、寄、進、に、あ、り、お、や、と、云
は、れ、也、

ふ、この、あ、る、も、お、わ、り、や、余、り、い、ま、は、石、を、し、は、し、
ハ、無、し、

○服部耕石と種々印法をえり、か、り、し、は、し、は、し、
き、得、た、る、ハ、信、前、石、の、こ、と、と、う、若、し、ら、う、日、本、を、
嫌、石、と、云、く、ハ、ま、と、し、ハ、信、前、の、し、の、を、用、ひ、は、し、若、
ハ、可、多、く、自、石、も、出、た、る、か、今、出、る、ハ、若、し、は、ら、り、石、
ハ、鑑、識、あ、る、こ、の、其、也、の、判、り、は、し、は、し、は、
ハ、若、し、由、り、の、在、石、の、脈、に、掘、り、あ、ら、は、し、は、し、
ハ、若、し、ハ、此、の、身、を、地、ハ、走、去、と、云、ふ、は、し、は、し、
ハ、山、奥、に、入、り、ハ、は、し、は、し、は、し、は、し、
ハ、切、り、出、す、こ、と、ハ、藤、ん、と、ハ、大、持、粉、末、と、ハ、硬、質、物、
若、の、找、料、と、云、う、と、云、ふ、ハ、久、張、印、法、ハ、使、用、さ、し、

黄楊のツゲハ掃き掃きを覚悟する材料として多く
用いられ其の産材ハ島ツゲと唱ふるものありハ大島
の産物也、こん石上等者、内地産る品有るもの
といふ未だ就て耕不修、印刷向の朱肉の可なる所
以ハ原料の粗劣ハ、印刷向といハ水銀を云扱ふ
一種の秘法あり、是ハ水銀を極力振つて振りぬく
が法あり、織機
の末とるが故に油よ和ん肉を先^ハして七印の
半甚はらうし、小印のことき、一過ツツト捺し
てじまを法とす、印刷向の朱の末微細
の故に、つくとる、耕不又早く朱を先
の坊へそい其の製法なる個性を具し、

このへりし、或る薬材各校に七八人の生徒を
お銀ら朱を作らしめ、是れを卒業試験と
し、而して其の結果を
色を異らし、一七回し、と云ふ水
銀を不心、銀りの力の差も
の粗劣也、又交じり、分量も
あるが故、と云ふ
の今日、得る
れ、稀観の

六月廿日記

- 一 洲家譜
- 一 洲家大系圖
- 二冊
- 三冊 合一冊
- 洲家の大系図を著す保年万

南仙宮法涼が編する所の綾錦あり
池沼家譜ハ是れに次ぐものも定延
中平安千載堂文石編する所あり
綾錦ハ略する所北漢詳かろう例
家大系圖ハ天保年間伊勢の生川
春の編するもの最も備わらう方今
例書何れも無法と價高く余例譜
のつ外漢指を深むを厭ふ唯此系
譜の往々又書を感するもの也譜の
てかあやうく置くと云ふ二種も價四
十五圓あり沈香の價もきき一端と
云ふへ

○大分縣の金名が近年とあり漸やく漸的さへて未だ
石佛群と云ふもの多敷の佛像も何れも若し
ハ金名家が多し江表を拂はううに疑ひある近
年亦大分の西東半島の金名類を研究し此人が
ありて西東金名年表と附帯の圖を二冊と
て出版してある尚ほ此の西東にある塔の形式
ニ特徴がある亦多敷燈の形式の塔がある所から
特ニ之れが説的を説き附圖を二冊出版し
てある是れハ天浪優一と云ふ人の技師である
此の印刷物の金名の上格めて大切なるものある
が何れも百部出づれば心づかざるべきものとあるから一
向に流布してあるの自今ハ略の偶然なるもの

此のこんと石佛群とを合ひて大分好の金石
の如くは豊前やあるか七戸と云、四東の塔も
弘安の年物あると云、文政建武の年物の刻
さんれもある、燈籠式の塔の取て四東に
限つてあるひもある、大にも教正備へた校式
か多く存してある、校碑の形式も他とい異
つてあるのが見える、免角金名の上へ次々
料を増へたと云ふべきかあると云、六月廿九日記

萬葉集

本
諸集
千八百七頁
三十一寸横一尺
同校正刷
二部
同大正十二年刊本
五部
同復興新刊本

日の震災により焼失せしもの

萬葉集諸本

桂本萬葉集
嘉曆傳承本萬葉集
藍紙本萬葉集
元曆校本萬葉集
天治本萬葉集
傳壬生隆祐筆本萬葉集
金澤本萬葉集
傳冷泉為賴筆本萬葉集
神田本萬葉集
西本願寺本萬葉集
温故堂本萬葉集
東京帝國大學本萬葉集
大矢本萬葉集
金澤文庫本萬葉集
京都帝國大學本萬葉集
細井本萬葉集
活字無訓本萬葉集
活字附訓本萬葉集
中山本類聚古集
建長本古葉略類聚鈔

校本萬葉集系統圖

引用書

前田本和歌童蒙抄
有栖川宮家本袖中抄
嘉禎本和歌色葉集
關本八雲抄
傳顯昭筆本八雲抄
乾元本八雲抄
傳融覺筆本八雲抄
前田本釋日本紀
和歌真字序

萬葉集新校本

竹柏園本萬葉集註釋
東京帝國大學本萬葉集註釋
著者自筆萬葉集管見
萬葉拾穗抄
橘本萬葉代匠記初稿本
東京帝國大學本萬葉代匠記精撰本
國語研究室本萬葉代匠記精撰本
著者自筆萬葉改訓抄
著者自筆萬葉集訓釋
著者自筆萬葉集童蒙抄
緣信本萬葉集童蒙抄
萬葉考
青柳種信本萬葉考
青木管根本萬葉考
小林歌城舊藏本萬葉考
薰庭本萬葉考
齋藤雀志舊藏本萬葉考
萬葉集玉の小琴
萬葉考槻の落葉
萬葉集略解
萬葉集燈
萬葉集招解
著者自筆萬葉集攷證
著者自筆萬葉集墨繩
萬葉集繪孺手
萬葉集古義
萬葉集略解岡本保孝書入
萬葉集略解札記
萬葉集美夫君志
著者自筆萬葉集略解補正

諸註釋書

校本萬葉集稿本
同淨書本
同校正刷
同大正十二年刊本
同復興新刊本

圖中赤字にて示せるは昨年九月一日の震災により焼失せしもの

校本萬葉集稿本 百二十冊 同淨書本 二冊四千八百八十三頁 同校正刷 二部 同大正十二年刊本 五百部 同復興新刊本

本文

全二十册全部寫真金屬版
四千八百八十二頁

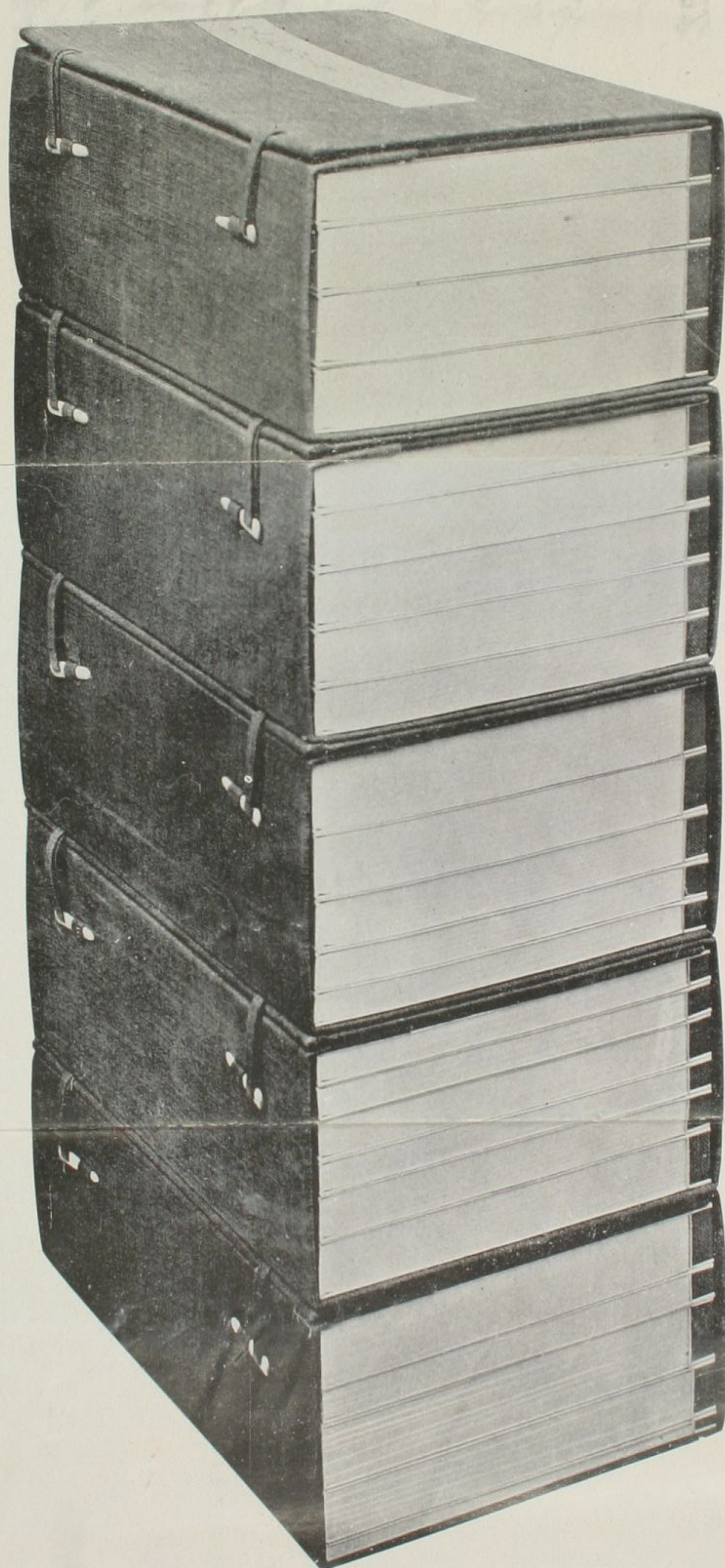
本書の内容

金澤本萬葉集二册
傳冷泉爲頼筆本萬葉集一册
神田本萬葉集二十册
西本願寺本萬葉集二十册

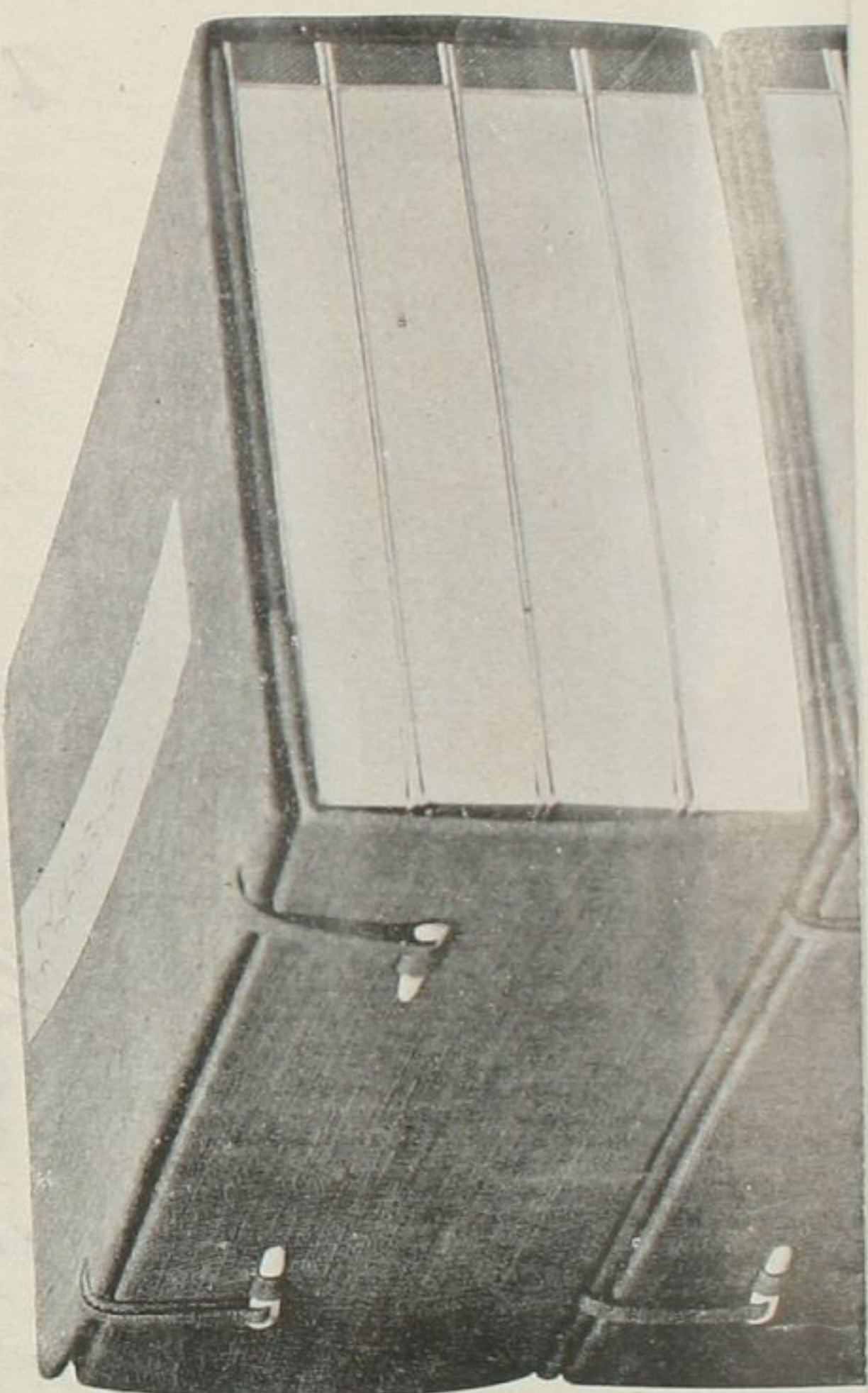
冊
帝室御物
前田利爲侯藏
竹柏園藏
神田金樹男藏

校本萬葉集全五帙二十五册縮寫

豎 七寸八分
横 五寸四分
高さ 一尺六寸二分



校本萬葉集全五



本書の内容

本文 全二十冊 全部寫眞金屬版
四千八百八十二頁
萬葉集二十卷を、寛永版本を底本とし、帝室御物桂本、以下の二十種を以つて校合を加へ、更に仙覺以後の學者の説を網羅し、上欄には有栖川宮家御藏袖中抄古寫本以下數種の古寫本に引用せられてゐる萬葉集の文をも載せた。これらの使用した諸書はいづれも極めて貴重なるもので、從來その存在をも知られなかつたものが多い。かくてその使用した本は、諸本二十種二十二本、引用書六種九本、學書二十二種二十九本、合せて四十

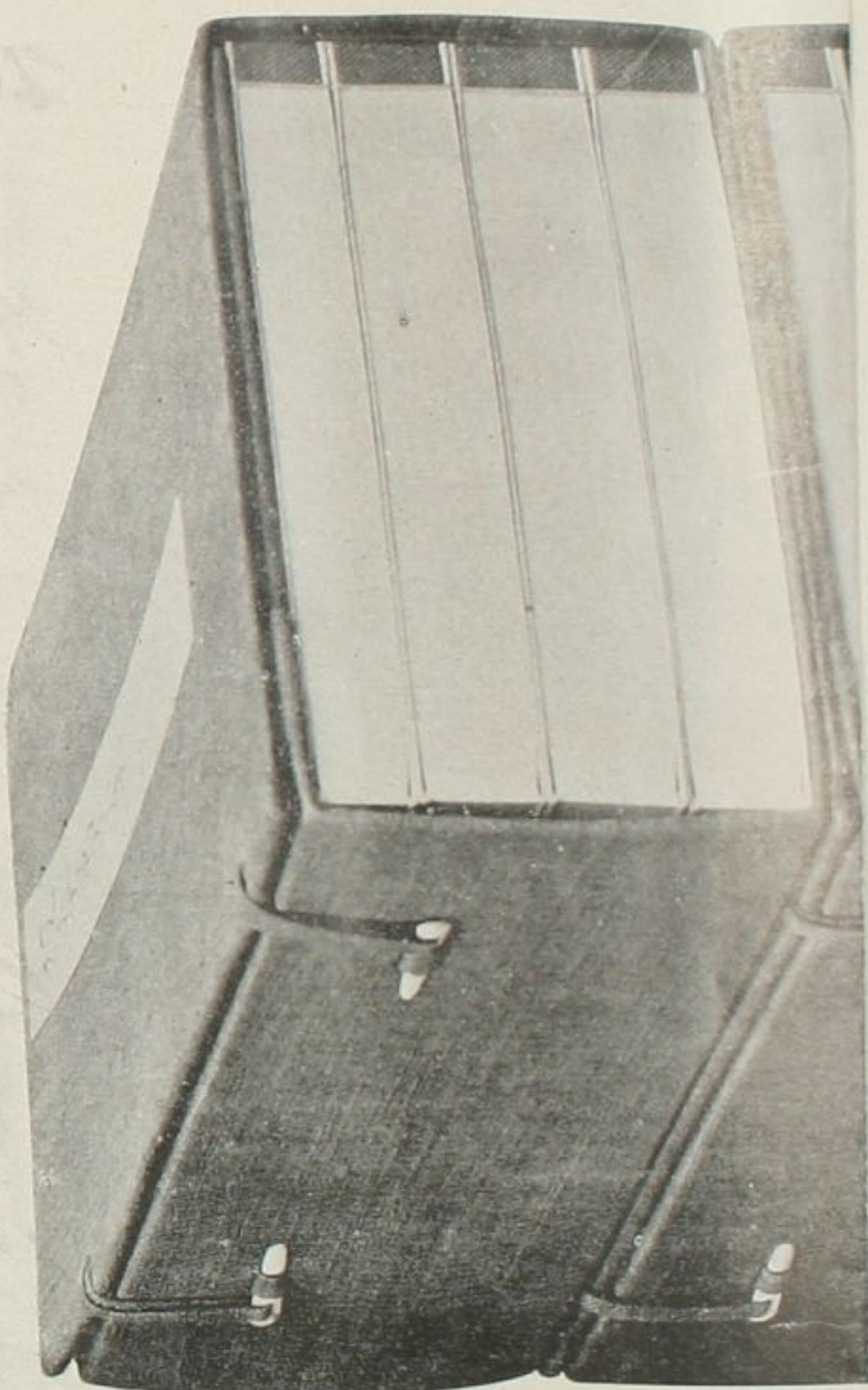
詞、竹柏園本仙覺抄、東京帝國大學本仙覺抄、岩崎文庫本仙覺抄、稱名寺本仙覺奏覽狀、曼殊院本仙覺奏覽狀、田中本詞林采葉抄、前田本萬葉類葉抄、雀輕子本宗祇抄、岩崎文庫本宗祇抄、

金澤本萬葉集二冊	一一	冊冊	帝室御物
傳冷泉爲頼筆本萬葉集一冊			前田利爲侯藏
神田本萬葉集二十冊			竹柏園藏
西本願寺本萬葉集二十冊			神田金樹男藏
溫故堂本萬葉集二十冊			竹柏園藏
東京帝國大學本萬葉集二十冊			岩崎文庫藏
大矢本萬葉集二十冊			東京帝國大學藏
金澤文庫本萬葉集四卷	三一	卷卷	竹柏園藏
京都帝國大學本萬葉集二十冊			古筆了信氏藏
細井本萬葉集二十冊			竹柏園藏
活字無訓本萬葉集二十冊			京都帝國大學藏
			岩崎文庫藏
			東京帝國大學藏

豫算の公開

本書は實費頒布にして刊行の成立を見るを得ば足るを以て、

校本萬葉集全五



本書の内容

本文 全二十冊 全部寫眞金屬版
四千八百八十二頁
萬葉集二十卷を、寛永版本を底本とし、帝室御物桂本、以下の二十種を以つて校合を加へ、更に仙覺以後の學者の説を網羅し、上欄には有栖川宮家御藏袖中抄古寫本以下數種の古寫本に引用せられてゐる萬葉集の文をも載せた。これらの使用した諸書はいづれも極めて貴重なるもので、從來その存在をも知られなかつたものが多い。かくてその使用した本は、諸本二十種二十二本、引用書六種九本、學書二十二種二十九本、合せて四十八種六十二本の多きに上り、いづれも代表的なる證本のみである。

諸本

- | | |
|--------------|---------|
| 桂本萬葉集一卷 | 帝室御物 |
| 嘉曆傳承本萬葉集一冊 | 中山輔親侯藏 |
| 藍紙本萬葉集一卷 | 原富太郎氏藏 |
| 元暦校本萬葉集二十冊 | 有栖川宮家御藏 |
| 天治本萬葉集一卷 | 古河虎之助男藏 |
| 傳壬生隆祐筆本萬葉集三卷 | 福井貞一氏藏 |
| | 竹柏園藏 |

- | | | | |
|---------------|----|----|---------|
| 金澤本萬葉集二冊 | 一一 | 冊冊 | 帝室御物 |
| 傳冷泉爲頼筆本萬葉集一冊 | | | 前田利爲侯藏 |
| 神田本萬葉集二十冊 | | | 竹柏園藏 |
| 西本願寺本萬葉集二十冊 | | | 神田金樹男藏 |
| 溫故堂本萬葉集二十冊 | | | 竹柏園藏 |
| 東京帝國大學本萬葉集二十冊 | | | 岩崎文庫藏 |
| 大矢本萬葉集二十冊 | | | 東京帝國大學藏 |
| 金澤文庫本萬葉集四卷 | 三一 | 卷卷 | 竹柏園藏 |
| 京都帝國大學本萬葉集二十冊 | | | 古筆了信氏藏 |
| 細井本萬葉集二十冊 | | | 竹柏園藏 |
| 活字無訓本萬葉集二十冊 | | | 京都帝國大學藏 |
| 同 本萬葉集二十冊 | | | 岩崎文庫藏 |
| 活字附訓本萬葉集二十冊 | | | 東京帝國大學藏 |
| 同 本萬葉集二十冊 | | | 岩崎文庫藏 |
| 中山本類聚古集十六冊 | | | 金子直吉氏藏 |
| 建長本古葉略類聚鈔五冊 | 一四 | 冊冊 | 岩崎文庫藏 |
| 引用書 | | | 中山輔親侯藏 |
| 前田本和歌童蒙抄五冊 | | | 興福院藏 |
| 定爲本袖中抄二十卷 | | | 竹柏園藏 |
| 嘉禎本和歌色葉集一卷 | | | 前田利爲侯藏 |
| | | | 有栖川宮家御藏 |
| | | | 上野精一氏藏 |

關戸本八雲抄二冊 關戸守彦氏藏
 傳顯昭筆本八雲抄一冊 同 前
 乾元本八雲抄一冊 竹柏園藏
 傳融覺筆本八雲抄三冊 池邊義敦氏藏
 前田本釋日本紀二十九冊 前田利爲侯藏
 和歌眞字序一卷 保坂潤治氏藏

學書

竹柏園本萬葉集註釋十冊 竹柏園藏
 東京帝國大學本萬葉集註釋十冊 東京帝國大學藏
 著者自筆萬葉集管見十冊 同 前
 萬葉拾穂抄三十冊 同 前
 橋本萬葉代匠記初稿本二十二冊 橋純一氏藏
 東京帝國大學本萬葉代匠記精撰本五十一冊 東京帝國大學藏
 國語研究室本萬葉辭案抄三冊 同 前
 著者自筆萬葉改訓抄三冊 羽倉信眞氏藏
 著者自筆萬葉集訓釋二冊 同 前
 著者自筆萬葉集童蒙抄四十六冊 同 前
 緣信本萬葉集童蒙抄四十四冊 松井簡治氏藏
 萬葉考九冊 東京帝國大學藏
 青柳種信本萬葉考十一冊 竹柏園藏

たもので、次の如き内容から成つてゐる。

校本萬葉集編纂の由來および經過
 校本萬葉集編纂の方針
 校本萬葉集使用上の注意要項
 異體字通用字一覽表
 萬葉集諸本解説附引用書解説
 萬葉集諸本系統の研究 橋本 進吉補
 武田 祐吉稿
 萬葉集注釋書の研究 武田 祐吉稿
 久松 潜一稿
 萬葉集研究史 佐佐木信綱稿
 以上の如く獨立した研究としても成立するものが多い。

諸本輯影 全二冊 木版極彩色圖三枚(桂萬葉、金澤萬葉、元曆萬葉) 石版彩色圖二枚(仙覺本萬葉集二圖) 寫眞玻璃版二百九十五頁、解説三百頁、目錄二十二頁

校本萬葉集の校合に用ゐたものを主とし、その外あらゆる現存せる古寫本古刊本名家自筆本等の寫眞を輯録したもので、次の如き内容を有してゐる。

萬葉集の諸寫本および刊本四十八種百五十五圖
 桂本、嘉曆傳承本、金砂子切、藍紙本、元曆校本、同上瑠本、同上松平樂翁本、天治本、檢天治萬葉集、傳壬生隆祐筆本、金澤本、傳俊寛筆切、桂類似切、尼崎切、傳冷泉爲頼筆本、定家様切、後京極様切、春日懷紙裏切、橋本經亮影寫春日祐春切、

薰庭本萬葉考七冊 同 前
 青木菅根本萬葉考五冊 同 前
 小林歌城舊藏本萬葉考一冊 同 前
 齋藤雀志舊藏本萬葉考一冊 同 前
 萬葉集玉の小琴二冊 東京帝國大學藏
 萬葉考槻の落葉三冊 同 前
 萬葉集略解三十冊 同 前
 萬葉集燈五冊 同 前
 萬葉集摺解一冊 松波信子氏藏
 著者自筆萬葉集攷證十五冊 帝國圖書館藏
 著者自筆萬葉集墨繩八冊 橋純一氏藏
 萬葉集檜孺手七冊 同 前
 萬葉集古義百四十一冊 東京帝國大學藏
 萬葉集略解岡本保孝書入三十冊 竹柏園藏
 萬葉集略解札記十一冊 帝國圖書館藏
 萬葉集美夫君志八冊 東京帝國大學藏
 著者自筆萬葉集略解補正十六冊 岩崎文庫藏

首卷

全二冊 寫眞金屬版三十頁 活版約五百二十頁

これは校本萬葉集を使用するについて必要なる知識を網羅し

同無名氏切、神田本、西本願寺本、田中本、水戸阿野本、京都帝國大學國文學研究室本、溫故堂本、東京帝國大學本、大矢本、近衛本、金澤文庫本、竹柏園一本、廣幡本、京都帝國大學本、谷森本、谷森氏一本、多和文庫本、傳空性法親王筆本、岩崎文庫一本、野宮定基本、圖書寮一本、細井本、林道春校本、活字無訓本、活字附訓本、寛永版本、寶永版本、今出河本、冬忠切、名家の書寫校合書入に係る本十二種二十五圖
 三宅正堅書入本、水戸中院本、水戸飛鳥井本、四點本、今井似閑書入本、新井白石書入本、谷川士清書入本、村田春道書入本、山岡明阿書入本、關谷潛書入本、校異本、木村正辭校本
 類聚抄出假字改定の諸本九種三十圖
 中山本類聚古集、建長本古葉略類聚鈔、橋本經亮影寫後二條院切、赤人集、久世切、前田家一本、白雲書庫本、京都帝國大學研究室本、大字切

萬葉集を引用せる書籍の古寫本八種二十圖
 津輕本綺語抄、前田本和歌童蒙抄、定爲本袖中抄、嘉禎本和歌色葉集、乾元本八雲抄、傳融覺筆本八雲抄、前田本釋日本紀、和歌眞字序

學書の古寫本および著者自筆本四十三種七十圖
 萬葉集目錄、宮内省圖書寮本萬葉集抄、人丸歌抄、萬葉集佳

詞、竹柏園本仙覺抄、東京帝國大學本仙覺抄、岩崎文庫本仙覺抄、稱名寺本仙覺奏覽狀、曼殊院本仙覺奏覽狀、田中本詞林采葉抄、前田本萬葉類葉抄、雀輕子本宗祇抄、岩崎文庫本宗祇抄、北村季吟自筆萬葉拾穗抄、同萬葉秘訣、下河邊長流自筆萬葉集管見、契沖阿闍梨自筆萬葉代匠記初稿本、同上萬葉代匠記精撰本、契沖手簡、似閑本萬葉代匠記、水戸家釋萬葉集稿本、荷田春滿自筆萬葉和假名訓、同萬葉集訓釋、同萬葉改訓抄、同萬葉僻案抄、平縁信筆萬葉童蒙抄、賀茂眞淵自筆萬葉解通釋、同萬葉解、同萬葉集大考、加藤千蔭自筆萬葉集略解、略解關係書類(春海、宣長、雅望)、本居宣長自筆萬葉卷之次第、上田秋成自筆金砂、同萬葉集目安補正、岸本由豆流自筆萬葉集攷證、橘守部自筆萬葉摘翠集、同萬葉集墨繩、鹿持雅澄自筆萬葉集古義品物解、同萬葉集品物圖繪、安藤野雁自筆萬葉集新考、岡本況齋書入萬葉集略解、木村正辭自筆萬葉集略解補正、同萬葉集美夫君志

右はいづれも圖版の對面に詳細なる説明がついてゐる。

附卷 全一冊活字印刷約五十頁

この一冊は文學博士上田萬年、同芳賀矢一、男爵平山成信、文學博士新村出諸氏の本書に對する文詞と、文學博士佐佐木信綱氏の「萬葉集の古寫本および古筆の研究」等を收める。

豫算の公開

本書は實費頒布にして刊行の成立を見るを得ば足るを以て、豫約出版界の例を破つて豫算を公開する。二百五十部印行の豫定(内十部は納本及無代贈呈)で一部當りは次の通りである。

用紙費	三〇・一五〇
寫真金屬版費	五二・六二九
彩色版費	一・六六八
寫真撮影及寫真玻璃版費	五・一〇〇
活版費	六・六一七
表紙及製本製帙費	九・四七九
原稿復活整理及校正費	六・二五〇
新聞雜誌廣告及小冊子費	四・七〇〇
事務員費、通信費、雜費、豫備費	三・四〇七
合 計	一一〇・〇〇〇

以上のうち事務員費等の一項の如きは到底これでは足りぬであらうと考へてゐる財團。法人啓明會からの出版補助金は昨年の刊行によつて支出し盡し、また昨年の震災による損害は巨額に上るけれども、それらは一切今度の豫算には計上しない。以上の通りであるから是非豫定部數に満ちなければならぬ。故に知人諸君にも御勸誘願ひたく、かつ切り詰めた豫算であるから中途の御解約は非常に苦痛である。又手数料を出して書店に取次をさせる餘地を有せぬから直接の御加盟に限る次第である。

(本文見本)

(一五)

校本萬葉集卷第一(十二オ)

八〇

(一五)
元神五
今細神
類文無
附京温西

○今訓ハ別行片假字ニ書ケリ。
元墨ノ書入アリ。表々之豊^{ヨロ}ハ^ヨモ
ト^ニト^ク之^ヲ格^ヲ 資^ニ業^ニ三^ニ位^ニ能^ハ回^ル
注^シ所^カク^ナム^移シ^侍リ^ケル
ワ^タツ^ミト^ハ海^ヲイ^フイ^リヒ
ノ^山ノ^トホ^キト^コロ^ナト^ニハ
ウ^ミニ^イル^ヤウ^ニミ^ユル^オリ
ソ^ラニ^タナ^ヒク^イロ^アカ^クチ
サ^ハケ^{タル}ハ^タニ^タレ^ハウ
ミ^ノヒ^コキ^ウハ^ニト^ハ

ワ^タツ^ミノ^トヨ^ハタ^クモ^ニ 伊^リヒ^サレ^コヨ^ロノ^ツキ^ヨ
渡^ル津^ノ海^乃豊^旗雲^爾伊^理比^沙之^今夜^乃月^夜
ス^ミア^カク^クソ^ク
清明^巳曾^ク

【本文】三沙元類抄冷弥神佐文西温矢京称細左ニ称イアリイハ
朱。三明温ナシ。右ニ書ケリ。本文中清巳ノ間ニ。符アリ。
訓。ワタツミノ元。つみノ間ニ墨。符アリ。ソノ右ニ墨ウアリ。

(首巻組方見本)

本書編纂の方針

(一五)
類文今元
無矢細神五
附京温西

(本文見本)

(一五)

校本萬葉集卷第一(十二才)

八〇

○冷訓ハ別行片假字ニ書ケリ。
元墨ノ書入アリ。表々之豐標
ト云々之終。資業三位。能回
注師カクナム。終シ侍リケル
ワタツミトハ海ライファイリヒ
ノ山ノトホキトコロナトニハ
ウミニイルヤウニミユルオリ
ソラニタナヒクイロアカクテ
サ、ケタルハタニ、タレハウ
ミノヒロキウヘニミユレハト
ヨハタクモトヨムナリイリヒ
トキニハ月モアカク。ラセハ
コヨヒノ月スミアカシトヨム
ナリ。
元訓ノ上方ニ朱ノ書入アリ。
定、まほ海屋也。當夕日雲赤
色也似幡也。入日ノよくある附
八月云々光清也。
西神細温京朱ノ注文アリ。今西
ニヨリテソノ文ヲ掲ケ他本ノ
異ヲソノ後ニ注ス。豊旗雲古語
海雲也。當夕日雲赤色也似幡也。
入日能時者月光清也。神當夕日
ヲ堂名曰トセリ。入日ノ日ノ右

渡津海乃豊旗雲爾伊理比沙之今夜乃月夜
清明已曾
スミアカクコソ
ワタツミノトヨハタクモニイリヒサレコヨヒノツキヨ
スミアカクコソ
本文(三)沙元類。於冷神佐文。西温矢京。細左ニ称イアリ。ハ
朱。三明明温ナシ。右ニ書ケリ。本文中清已ノ間ニ。符アリ。
訓(一)ワタツミノ元。つみノ間ニ墨。符アリ。ソノ右ニ墨ウアリ。
類。つみノ間ニ墨。符アリ。ソノ右ニ墨ウアリ。冷神。ワタツウミ
ノ。三イリヒサシ。元。右ニ朱。或本子アリ。文。西温矢京。イリ
ヒ子シ。三コヨヒノツキヨ。元。つきよノ右ニ朱。或本ツクヨア
リ。類。こよひの月よ。細京。コヨイノツキヨ。三スミアカクコソ。
京スミアカリコソ。
諸説。○伊理比沙之。イリヒサシ。仙イリヒサシヲ否トシ。沙ハ
称ニ作リテ。イリヒ子シト訓スル。三條院御本ヲ可トス。拾沙
ニ作リテ。サシト訓スルヲ可トス。○ツキヨ。考。ツクヨ。○
清明已曾。スミアカクコソ。僻。サヤケシトコソ。考。アキラケク
コソ。古。明ハ。照ノ誤。訓。キヨクテリコソ。明ハ。有ノ誤。ニテ。キヨ
クアリコソトスル。或説ヲ否トス。

十二

(諸本輯影説明見本)

第一 桂本萬葉集 その一

帝室御物

帝室御物桂本萬葉集は卷第四の殘簡一卷で、豎八寸八分の卷子本である。もと前田利家の室松子の有であつたが、後桂宮に獻じ今は帝室御物となつてゐる。草、白、薄赤、紫、茶、藍、黄の七色の繼色紙に金銀泥をもて花鳥草木等を畫いた上に書寫したもので、天地に細き墨界があるが寫眞には現れない。筆者については古く紀貫之もしくは源順等の筆と傳へ、その他にも説があるが、いまだ何人の筆とも決し難いものである。萬葉集を書寫したもので現存せるうちの最古のものであつて、平安朝中期の書寫に係るものと認められる。圖はその最初の部分で、右の端は卷物の見返しの紙と本文の紙との繼目である。佐保河乃云々の歌には訓が無く、訓を書くべき場所を空白のままに残してゐる。「あかこまの」云々の行の下端の一字はもとの字を摺り消して書いてある。

(諸本輯影見本)

佐保河乃瀧之官能少歷本莫別鳥在
乍毛張之未者立隱全

天皇賜海上女王御歌一首

宇奈宮良位
天皇也

赤駒之越馬柵乃織結師妹情者疑毛奈思

あつこまはらわすじまつりのしめわさ
いもつこくみけうつひまぢ

右今業此歌擬古之作也但し時常使

賜斯哥欵

海上王奉和歌一首

志貴皇子之女也

(首巻組方見本)

本書編纂の方針

本書の目的 本書は諸種の萬葉集古寫本及古版本を比較し、諸本に於ける本文及訓の異同を示すを目的とし、兼ねて同集の本文及訓に關する諸註釋書の説を一目の下に知らしめん事を期したものである。

底本 諸本に於ける異同を調査するには、或一本を基礎とし、これと他の諸本と比較對校するを便とする。この比較の基礎、即底本としては寛永貳拾年癸未臘月吉日洛陽三條寺町誓願寺前安田十兵衛新刊の奥附ある所謂寛永版萬葉集を用ゐた。この本は必しも善本ではないけれども、江戸時代に最普通に行はれた本であり、江戸時代の學者も研究の基礎としたもので、諸註釋書の類にも引かれて居るから、之を底本とするのが最便利であるからである。さうして精密に調査すれば、寛永版にも寛永以後入木して補刻したところがあつて、諸本皆一樣ではない。今はその中寛永の原刻に近いとおもはれるものを採つた。

比較に用ゐた諸本 校合に用ゐた諸本はすべて二十種であつて、我々が見る事を得た平安朝及鎌倉時代の寫本の全部、室町時代の寫本の殆全部、寛永以前の版本の全部及江戸初



校報

専門學校設立認可

本大學の附屬として早稲田専門學校設立の件に關し豫て其筋へ出願中の所、四月十九日文部大臣よりその認可ありたり。

定時維持員會

五月八日午後二時定時維持員會を開き、大隈會長、渡邊、金子、田中、坪内、中島、上原、松平伯、寺尾、淺野、阪本、宮田、遊澤子、鹽澤、平沼の各維持員及難波幹事出席の上左記の件を討議し満場異議なく承認したり。

新學年始業式及授業開始

四月十六日午前十時新學年の始業式を行ひ、田中常務理事より、學園の教旨を詳細に説述し、學修法、自治的訓練、品性の陶冶、健康の保全等に關し懇ろなる訓示ありたり。猶ほ授業は各教科一般に二十一日より開始したり。五月一日甲教室に於て文學部一學年の入學式を行ひ片上學部長より訓示ありたり。

専門學校開校式

四月十九日午後五時より第二十教室に於て早稲田専門學校開校式を舉行す。定刻坂本校長より式辭を兼ねて同校の教育方針を説き新入生に對する希望を述べ、終つて田中常務理事、靜養中の總長に代つて一場の挨拶をなし且つ各學生の勉勵を切望して式を閉ぢたり。猶ほ式後會館に於て來賓その他に粗餐を呈し、授業は同日第二時間目より開始したり。

教授會

政治經濟部教授會、四月三十日午後五時開會し、左の諸件を審議したり。

- 一、專門部卒業生の學部入學に關する件
- 一、大學院學生の入學に關する件
- その他
- 法學部教授會、四月二十三日午後三時開會し、專門部卒業生の學部入學に關する件、專門部卒業生の學科課程の件等を議したり。
- 文學部教授會、五月七日午後二時開會し、左の諸件を審議したり。
- 一、大學院學生入學許可の件
- 一、學科課程變更に伴ふ新試験規定實施に關する件

未済試験

專門部各科の進級及び卒業の未済試験を左の通り行ひたり。

事務所移轉

高等師範部事務所(專門學校事務所と同所)法學部事務所(第五十一教室跡)

大倉和親氏の特志寄附

前號所載の如く森村學明會より應用化學科教室復舊費中へ寄附申込ありたるが、今回大倉和親氏よりも同復舊費へ金貳千五百圓の寄附申出に接したり。これ本大學の感謝に堪えざる所なり。因に同教室は目下東京鋼材株式會社に於て鐵骨組立中にて來る八月末までに建築落成九月より同室に於て授業開始の豫定なり。

鹽澤理事の外遊

五月十七日午前九時十五分理事鹽澤昌貞博士は加奈太經由英佛獨その他へ學事視察のため東京驛を發したるが、當日同驛プラットフォームには高田總長、田中理事はじめ多數の教職員校友その他の官民有力者に送られ、博士を敬慕する學生數百は力に充てる校歌を高唱してその門出を祝福する折しも、汽車は徐ろに進み、何れも博士の健康と航路の安全とを念じつ、車窓の人を見送れり。猶ほその有志及び政治學部學生委員及び端艇部員等は横濱の早頭に隨伴してエンプレス、オス、エシヤ號の出航に別れを告げたり。

學園關係の新代

議士

中原の惡戦苦闘空しからず、重ねて或は新たに當選の榮冠を得られたる士の中に、校友及び學園直接關係者五十六名、舊教職員九名の多きに上る。今その名を録し、茲に謹んで祝意を表すると同時に、政界愈々多事の秋に瀕して各員の健康と自重とを祈る次第なり。

東京府

- 第二區 林田龜太郎氏(舊教職員)
- 第四區 關直彦氏(舊教職員)
- 第七區 頼母木桂吉氏(舊教職員)
- 同 安藤正純氏(四、推)

第十區 鳩山 一郎氏(舊教職員)

第十七區 三木 武吉氏(七、邦法)

神奈川縣

第一區 大濱忠三郎氏(三、英木)

千葉縣

第六區 關 和知氏(六、邦法)

群馬縣

第一區 清水留三郎氏(六、邦法)

第四區 木村三四郎氏(六、邦政)

栃木縣

第三區 神田 正雄氏(四、邦政)

宮城縣

第四區内ヶ崎作三郎氏(教 授)

福島縣

第四區 栗山 博氏(四、大政)

第七區 中野 寅吉氏(四、邦法)

第九區 比佐 昌平氏(四、大政)

秋田縣

第三區 信太儀右衛門氏(四、推)

山形縣

第五區 齊藤真三郎氏(六、邦政)

第六區 細梅 三郎氏(六、邦政)

青森縣

第三區 兼田 秀雄氏 (官、專政)

北海道

第四區 坂東幸太郎氏 (官、專政)

新潟縣

第一區 松井 郡治氏 (官、邦法)

第三區 増田 義一氏 (官、邦政)

第五區 石塚 三郎氏 (官、推)

第六區 建部 遜吾氏 (舊教職員)

第九區 石黒大次郎氏 (官、邦行)

第十區 山本悌 郎氏 (舊教職員)

長野縣

第五區 山本 慎平氏 (官、邦政)

第六區 深井 功氏 (官、推)

第七區 降旗元太郎氏 (官、邦政)

富山縣

第二區 荒井 健三氏 (官、推)

第四區 寺島 權藏氏 (官、大政)

石川縣

第一區 永井柳太郎氏 (官、大政)

第七區 三橋四郎次氏 (官、英政)

第八區 永田善三郎氏 (官、專政)

愛知縣

第九區 山本 勝次氏 (官、邦政)

岐阜縣

第一區 小山 松壽氏 (官、邦法)

三重縣

第六區 山田 道兄氏 (官、大政)

大阪府

第八區 尾崎 行雄氏 (舊教職員)

第九區 武内 作平氏 (官、推)

第十區 田中 萬逸氏 (官、推)

兵庫縣

第二區 田中 武雄氏 (官、推)

第六區 井上 雅二氏 (官、英政)

第七區 土井 權大氏 (官、英政)

第十區 齋藤 隆夫氏 (官、邦行)

滋賀縣

第五區 堤 康次郎氏 (官、大政)

和歌山縣

第四區 田淵 豊吉氏 (官、大政)

岡山縣

第三區 清水 長郷氏 (官、專政)

第六區 西村丹治郎氏 (官、邦政)

廣島縣

第一區 早速 整爾氏 (官、邦政)

鳥取縣

第八區 山道 襄一氏 (官、大政)

長崎縣

第一區 由谷 義治氏 (官、推)

福岡縣

第一區 西岡竹次郎氏 (官、專法)

第三區 今里準太郎氏 (官、大政)

第五區 森 肇氏 (官、邦政)

鹿兒島縣

第一區 床次竹二郎氏 (舊教職員)

佐賀縣

第四區 田口 文次氏 (官、推)

教員の異動

理工學部助教授 坪内 信氏

同 藤井鹿三郎氏

右教授嘱任 外岡茂十郎氏

法學部講師 佐藤 武夫氏

理工學部建築 學科工學士 (大正十二年理工學部)

右助教嘱任 久保田明光氏

專門部政治英語 早稻田大學政學士 (大正八年大學部政治經濟科大學部)

高等師範部國語 島野 幸次氏

高等師範部英語 吉田 周平氏 (大正六年高等師範部)

文學部西洋美術史 坂崎 恒氏

早稻田文學士 (明治四十三年大學部英文學科)

應用化學科護照 大場獸之介氏

機械工學科機械工學橫山 勝任氏

應用化學科電氣化學 庄司 務氏

工學士 大宮英之助氏

右講師嘱任 出石 誠彦氏

英語 野村 猛氏

右高等學院教授嘱任 小泉 素彦氏

文學士 學院數學 理學士 自在畫 工學士

右高等學院講師嘱任 小泉 素彦氏

講師

牧 一氏

同上 二上 兵治氏

同上 兒島献吉郎氏

同上 ウッドマン氏

同上 岸畑 久吉氏

同上 井上 孚應氏

同上 本田 親二氏

同上 太田 哲三氏

同上 吉村 繁俊氏

同上 村瀬 直養氏

同上 同 エリカ、ジョンズ夫人

同上 同 福原 俊九氏

同上 同 市川 繁彌氏

同上 同 志永 直彦氏

同上 同 青山秀三郎氏

同上 同 堀 義路氏

同上 同 水野範之助氏

同上 同 吉田 謹平氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

同上 同 廣瀬 誠一氏

訂正 前號校報中、專門部副主事大島正一氏とあるを專門部主事に訂正す。
大正十二年度卒業者追加
專門部政治科 英城 稻葉 孝
山口 波佐間保輔
和歌山 別所龍太郎

様啓過日、途中ニテ拝謁丈禮仕り候陳者
 共折入御覽候春日松、昨日山本様次郎
 三掛讓り渡申候先以テ得其人候事、相
 成りし生々満足致候山陽自刻竹田魚山陽題
 詩木鉢七其内月丸、相見可申考三御座候
 不取敢御禮送申
 二仲其折御話申、山陽自画山水題
 詩鶴首瓢、

白紙ノ箋

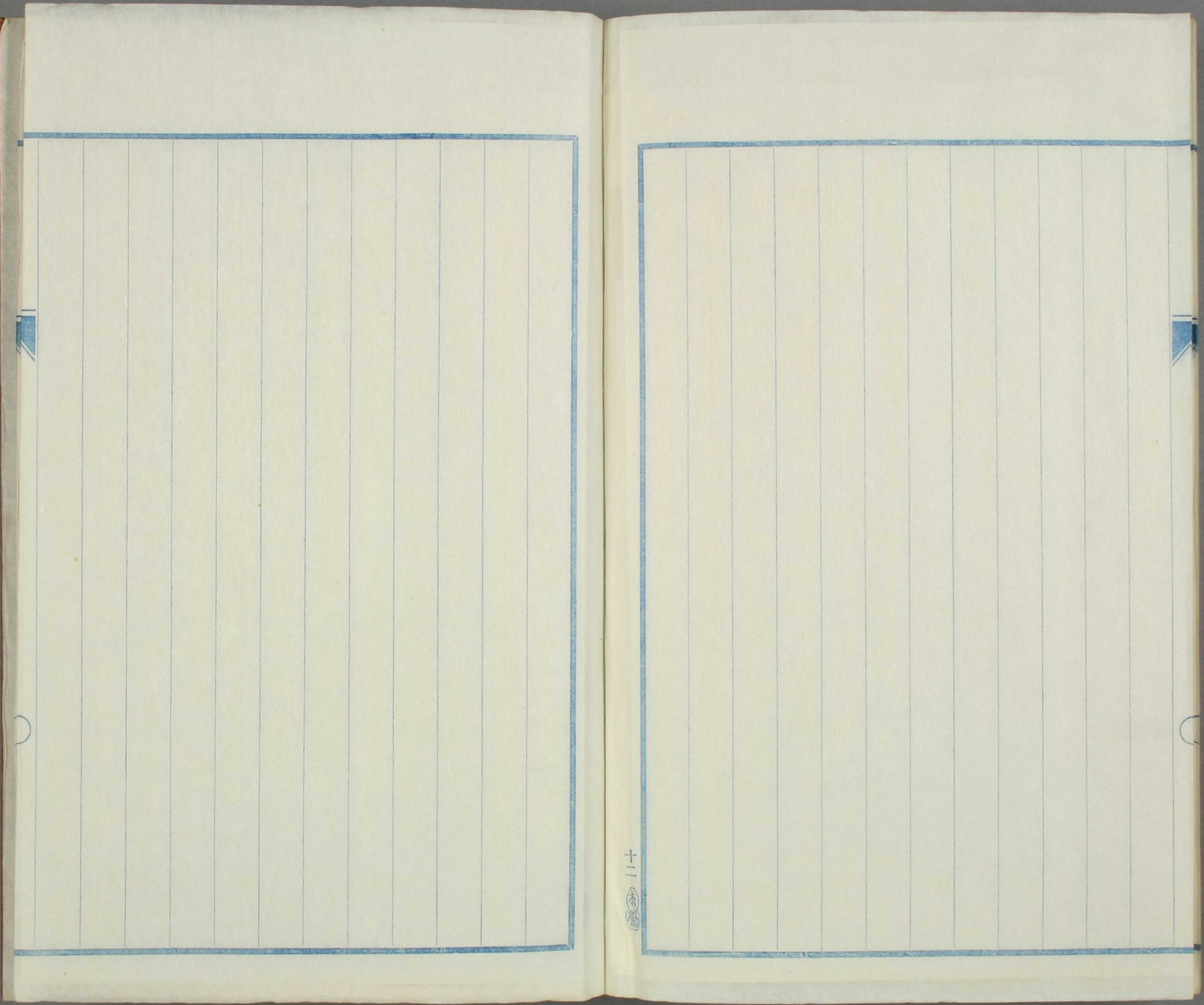


箱、佐藤信淵翁自題銀粉添書ニテ
 川翁京都より帰国ノ折山陽が贈ラレタルモノ
 三候
 右山生、故友ノ旧代議士奥田龜造氏ニ譲リ
 渡レ置候
 余ハ詳看万悉
 栗田典切

市島先生

庄ハ





早稻田大學圖書館和漢圖書分類表

大正十三年四月改定

一	經學	一	經學
二	史學	二	史學
三	子學	三	子學
四	集部	四	集部
五	詩部	五	詩部
六	書部	六	書部
七	畫部	七	畫部
八	印部	八	印部
九	雜部	九	雜部
十	漢部	十	漢部

Blank lined page with vertical blue lines.

Blank aged yellow page with horizontal lines.

Table of contents page with columns for page numbers and titles.

一	告白	一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十

